

石川真生

ISHIKAWA MAO

私に何が

WHAT CAN I DO?

できるか

2023年10月13日(金)―12月24日(日)

東京オペラシティ アートギャラリー

主催:公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

協賛:日本生命保険相互会社

ARTGALLERY

TOKYO OPERA CITY

1-11

赤花 アカバナー 沖縄の女

Red Flower: The Women of Okinawa

1975-1977

赤花アカバナー 沖縄の女

このシリーズは、もともと写真集『熱き日々 in キャンプハンセン!!』（1982）として結実したもの。その後、再編され写真集『赤花 アカバナー 沖縄の女』として2017年に出版された。シリーズのタイトルは、この写真集からとっている。石川は、このシリーズ撮影について次のように語っている。

赤花アカバナー 沖縄の女

黒人に対しての先入観がなかった。イタリア系アメリカ人の叔父さんがいい人だったから、米軍の犯罪は憎かったけど、米兵一人ひとりには恨みはなかったよ。あのときから米軍と米兵個人のことは自然と分けていたと思うよ。黒人兵と同棲している当時、米軍が放送して流行っていた「ルーツ」というテレビドラマがあったわけ。奴隷で連れてこられた黒人の歴史についてのドラマで、こんなに酷かったんだ、沖縄の歴史と黒人の歴史は重なるところがあるな、と思ったよ。沖縄対ヤマトと、黒人对白人というように。最初、黒人バーを選んだのは琉球新報の記者の紹介だったけど、もし白人バーを紹介されていたら、白人を撮ることになっただろうし、米兵であればよかったんだよ。結果的に黒人バーを紹介してくれて、自分と合ったからよかったなと思ったよ。

赤花アカバナー 沖縄の女

12-17

沖縄芝居－仲田幸子一行物語

Uchinaa Shibai (Okinawa Play):

A Story of NAKADA Sachiko's Theater Company

1977-1992

赤花アカバナー 沖縄の女

仲田幸子は、1933年に那覇市で生まれ、幼い頃に観た芝居に魅了され、1947年の15歳の時に「南月舞劇団」に入団し、その後、才能を見出され、喜劇女優となった。劇団の役者・脚本家の仲田龍太郎と結婚した後、二人で劇団（「仲田龍太郎一行」、1956年「劇団でいご座」に改名）を立ち上げ、2019年の引退まで沖縄喜劇の女王として活動した。

石川は、仲田幸子を、出演していたテレビのコマーシャルで知り、当時の夫と仲田が出演している沖縄芝居を実際に見に出かけた。この時のことを石川はこう述べている。

赤花アカバナー 沖縄の女

テレビで仲田幸子さんか娘と一緒にポーク缶詰の宣伝に出いたの。それで、この人おもしろそうとピンときたわけ。夫と一緒に、沖縄芝居を観に行っただよ。ウチナーグチの芝居で、言葉がわからなくても笑えたわけよ。その当時、私はウチナーグチをあまり理解できなくて、聞くのは少しできるけど、喋ることはできなかった。私のようにウチナーグチを喋れない、聞けない年代がどんどん増えた時代だった。

庶民をモデルにした芝居だから、観客にとっては自分や自分の親しい人たちの話でもあるわけよね。観客と演劇する人の距離が縮まって、自分の家族の物語を見ているような感じ。それで、次の芝居にひとりで観に行って、座長の仲田幸子さんに「写真を撮らせてください」と頼んだら、「いいよー、いつでもうちに

おいで」と言ってくれた。

写真集には、座長の幸子さんと夫の龍太郎さんと孫の正江とマイクが夜寝ている場面もあるのよ。座長が布団を蹴飛ばして太ももを出している。龍太郎さんに「出しても大丈夫ですか?」と聞いたら、「真生がやっていることだから大丈夫」とオッケーしてくれたんだよ。

赤花アカバナー 沖縄の女

12

仲田幸子（1933-）劇団でいご座座長。三枚目が当たり役、1978年頃

赤花アカバナー 沖縄の女

13
子役で出演する明美の娘・正江（6歳）。南伸一（右）、故・神山恒夫（中）与那原町（与那原農協ホール）、1978年3月

赤花アカバナー 沖縄の女

14

与那原町（大見武区公民館）、1978年4月

赤花アカバナー 沖縄の女

15

ああ、本当に旅回りの一座なんだな〜と思った。嘉手納町（嘉手納琉映）、1979年11月

赤花アカバナー 沖縄の女

16

満員の客席。南風原町（津嘉山公民館）、1981年6月

赤花アカバナー 沖縄の女

17

南風原町（津嘉山公民館）、1981年6月

赤花アカバナー 沖縄の女

18-19

沖縄芝居一名優たち

Uchinaa Shibai (Okinawa Play): Great Actors

1989-1992

赤花アカバナー 沖縄の女

沖縄のことば（しまくとぅば）を用いた演劇で、始まりは歌劇、そして後にセリフ劇に分けられた。沖縄芝居は庶民が支えている。その庶民性に惹かれた石川は、仲田に直談判して仲田や劇団の人々を撮影する許可を得た。1977年のことである。その後、14年にわたって撮影を続け、1991年に写真集『沖縄芝居 仲田幸子一行物語』（自費出版）を出版している。ここでは、特に撮影終盤に入って、戦前から活動していた役者たちが高齢化したことに危惧感を覚え、その記憶をのこすべく他の劇団の役者も含めた撮影も行った。これが、〈沖縄芝居一名優たち〉のシリーズである。

赤花アカバナー 沖縄の女

はじめは「仲田幸子一行」を14年間撮った。撮形が終わりに近づく頃、ちょうど戦前から活躍していたプロの沖縄芝居の役者たちが次々に年をとって、亡くなりはじめた時期だったのよ。そこで初めて、他の関西の役者もいま撮らないといけない、と使命感、義務感に駆られてさ。主役クラス、端役地諾（三線太鼓）、など芝居に関わっている人たちの7割、8割は撮影したんじゃないかな。

18

兼城道子さん

19

大宜見小太郎さん

赤花アカバナー 沖縄の女

20-24

港町エレジー

A Port Town Elegy

1983-1986

赤花アカバナー 沖縄の女

赤花アカバナー 沖縄の女

1983年、石川は、離婚後、生活のために那覇の安謝新港近くの港町で「あーまん」という居酒屋をはじめた。客の多くは、港湾労働者やマグロ船などの遠洋漁業の労働者たちだった。彼らを撮影し、1990年に、写真集『港町エレジー』を出版、そして那覇市民ギャラリーで展覧会として結実している。1986年までの3年ではあったが、石川は、客である労働者にたいしてこのように述べている。

赤花アカバナー 沖縄の女

男たちは、中学卒業してすぐ働いている人たちが多かった。家が貧しいとか、いろいろな事情でね。ウチナーグチしか喋らない人が多かったんだけど、それがさ、すぐ生っぽくて、正直者で、乱暴者で、でも優しいというのが全部入っていて、いわゆる人間臭い人たちだったの。哀愁も感じるわけよね。くっついて行って撮るといことが、仲田幸子さんのおきもそうだし、〈港町エレジー〉のおきもそうだし、いちいち演出しなくていいわけじゃない。そこには芝居以上の芝居があって、私にとってはすごくおもしろい世界でさ。自分がその世界に住んでいないからこそおもしろい世界。自分の好きなように生きて、好きなことを言って、好きなように行動する人たち。両方ともすごいプライドの高い人たちだったからさ。自分がやっていることに対して、全然卑下していなかったよ。

私は人を撮るとき、誰にでもプライドがあるからそれを傷つけないように、ちゃんと相手をリスペクトして、撮っているんだけど、ふと、私はひよっとしたらこのおっさんたちを舐めて見ているときがあったかもしれない。ひとりのおっさんが酔っ払っているときに、ピッと真顔になって、「俺たちにも人生があるんだよ」というセリフを言ったからさ。ドキッ!とした。それから再び襟を正してちゃんとこの人たちを尊敬してきっちりと見て撮らないといけないと思ったわけ。男で言えばフンドシを締め直したということだね。私は女だから、パンツを履き直した?というところかな（笑）。私はしつこく同じ人たちを撮り続ける。年月がたてば自然と相手の緊張がとれて私を意識しなくなる。何度も撮るうちにいろいろ見えてくる。人間は醜い面も美しい面もある。嘘も言うし、本当のことも言うし、優しさもあれば、暴力的なところもある。それもひっくるめて人間だから、そんな裏表を全部見たいと私は思うのよ。だから私は、相手が私が撮っていると見える距離でしか撮らない。隠れて撮るなんてやらないわよ。

25-31

Life in Philly

1986

赤花アカバナー 沖縄の女

このシリーズは、写真集『熱き日々 in キャンプハンセン!!』の撮影時に金武で知り合い、1977年にアメリカのフィラデルフィアに帰還した黒人兵士マイロン・カーを訪ねた際に撮影されたものである。2009年にこれらの写真を「Laugh it off」という展覧会（TOKIO OUT of Place、東京）で発表し、翌年写真集『Life in Philly』（Gallery OUT of PLACE）を出版している。

赤花アカバナー 沖縄の女

離婚後に一人娘を引き取ったから、写真だけでは食べていけないので、安定した仕事を考えたの。その前から飲み屋でバイトとかしていたから、居酒屋を開くことが手取り早かったのよ。父親に頼んで、銀行から父親の名義で400万円借りてもらって、毎月返済していたわけさ。3年間やって、店を売って借金を返したら50万円が残ったから、それでアメリカに飛んでいった。私がコザで働いている頃に、私の初めての黒人のボーイフレンドが海兵隊員のマイロン・カーを紹介してくれて、「そのうち私はアメリカに行って、貧乏な家の男たちが兵隊になって沖縄に来ていというルーツを見たいんだ」と彼に言ったことがある。それで彼がアメリカに帰国して、その後を私が追いかけて、彼と周辺の人たち一家を撮りに行ったのが〈Life in Philly〉なわけさ。マイロンは「俺が仕事に行っている間、ひとりでは危ないから、あんまりウロウロするなよ」と言ったけど、私は人の意見聞かない人だから、ひとりで街を歩いていたよ。いろんな人が声かけてくるんだけどさ。私はここにずっと住んでいるアジア系の女です、というような顔をしてサッサと歩いているわけ。だからなんも変なことされなかったよ。

とにかく、私は冬の寒い時期に入る前の秋ぐらいに、パッと帰ってきたわけ。そうして東京の飛行場に着いたら、みんな黒い髪で、暗い色の服を着てからさ、似たような人がいっぱいいるわけよね。でもアメリカは肌の色も違うし、カラフルな洋服を着ている人たちがいる。「げ!何これ!」って逆に思ってからにさ。ホームシックで帰ってきたのに、アメリカの方が普通に感じて、日本の画一的なものに違和感があっさ。それが、私の印象として強く残っているよ。

赤花アカバナー 沖縄の女

32-37

沖縄と自衛隊

Okinawa and the Japan Self-Defense Forces

1991-1995, 2003-

赤花アカバナー 沖縄の女

冒頭の自衛隊カンボジア派遣とは、1992年9月から、自衛隊が国際平和協力法に基づいて国際連合平和維持活動（PKO）の一環として、カンボジアへ派遣されたことを言っている。

赤花アカバナー 沖縄の女

PKOで初めて自衛隊が外国に出ていったのが、カンボジアだった。「カンボジアに自衛隊が行って壊れた橋を直しました」、「その後、橋が壊れて流れました」というニュースが朝日新聞に出ていたわけ。それで自衛隊がPKOでどんなことをしに行ったのか、カンボジアに見に行こうと決めたのよ。カンボジアには地

雷があって、地雷を踏んでしまった人たちをサポートしている団体がある。そことつながっている人が沖縄にいたから、その人に紹介してもらって行ったの。カンボジアに行ったら、本当に橋がなくなっていた。自衛隊が宿泊していた場所は、日本の自衛隊の看板が残っていただけで、宿舎は地元の職業訓練場として使われていたよ。陸上自衛隊には施設部隊があって、戦争のときに、軍隊が川を渡るために緊急で柄を作る。だけど本当の土木技術者ではないから、大きな雨とか嵐で壊れるわけよ。結局、オーストラリアの技術者が来て直すことになったと現地の人から聞いた。結局自衛隊は何のために行ったわけ?って思ったよ。橋を作ったというアピールだけじゃないかと思ったよ。なんで私が自衛隊を取材したかといえば、結婚した当時は自衛官が夫だったわけよね。自分は軍隊を否定するし、反自衛隊の立場だけど、昔から個人と団体を分けることが頭にあって、個人までは責めないという考えがあったから、自衛隊の彼と一緒にすることができたわけ。自衛隊員の妻だったときは自衛隊を撮ろうという意識は全く出なかった。ところが離婚した後に、ちゃんと自衛隊のなかに入って自分で見てから批判した方が良いと思ったの。自衛隊に知り合いがいたから、申し込み方を教えてもらって、取材申請をしたわけ。そしたらずいぶん調べられた後に、許可が下りたの。私が高校時代に反戦運動をしていたとか、元夫が自衛官だったとか、全部調べているんだよ。ところがオッケーだったわけ。後から知り合いになった自衛官が教えてくれたんだけど、真生さんがそういう素性だったとしても、外に出るのはいいことなんだということが自衛隊の結論になったみたい。当時、沖縄のマスコミは事件・事故以外は自衛隊の報道をすることはなかったから。

32
爆破前の不発弾を数える。キャンプ・シュワブ、1991年10月25日

33
P-3Cのコックピット内の中・高校生。慶良間上空、1993年7月26日

34
62式機関銃での撃ちゲーム。陸上自衛隊那覇駐屯地、1993年8月3日

35
「武装訓練」中。ミサイルを運ぶ。1993年9月9日

36
受験生の面接をする地連職員。ほとんどの若者がTシャツにジーンズ。航空自衛隊那覇基地、1993年9月26日

37
ここは元自衛隊のキャンプ地。老女が2人通って行った。カンボジア（タケオ）、1995年3月7日

38-44

基地を取り巻く人々

Fences, Okinawa

1989-

石川が、沖縄の米兵、特に黒人兵を撮影したのは、1975年コザが最初で、その後金武のバーでの撮影を継続し、さらに取材対象、場所を変えつつ、基地を取り巻く様々な立場の人々に取材し撮影している。

米軍を撮ったのは、黒人バーのときが初めてだけど、理不尽な沖縄の状況に怒って、米軍を見たいという思いで米兵を撮りはじめたわけよね。当然まだまだ撮りたいものがいっぱいあるわけよ。だから形を変えて、タイトルを変えて、新聞で記者と組んで、連載していた時期もある。私が基地の街をウロウロしていて、自分も若いから、米兵の彼氏ができるわけじゃない。それで彼氏を撮ったり、彼氏のエスコートで、基地のなかに入って撮ったり、繁華街を撮ったりとかいろいろなことをやった。だから黒人バーで働いたときに撮った写真で終わったんじゃないと、それからずっと続いているの。

私、PTSDにかかった米兵と金武の飲み屋で会っているわけ、イラク戦争のとき。ネイティヴアメリカンの彼は、「自分はイラクに6回も行かされて、本国に妻子がいるから、帰してくれと言っているけどなかなか帰してくれない」と言っていた。バーのママ曰く、彼がネイティヴアメリカンだから差別されているんだというのよ。私はランクが低い兵隊と知り合うことが多くて、ママも協力してくれて、そういう人たちを撮影してきたわけ。本当にみんな貧しいところから来て、兄弟もいっぱいいるから、律儀に兄弟の学費を送ってあげたりしていた。ママもアメリカで結婚して子どもがふたりできたけど離婚して戻ってきたから、兵隊に同情するわけじゃない。米兵は戦争に行って、真っ先に人を殺すけど、真っ先に殺されもする。兵隊はひとつのコマでしかないわけさ。一番偉くて命令する人たちは、ワシントンにいるわけじゃない。この人はちは、美味しいものを食べながら命令だけさね。行け!って言われたら行くし、戻れ!と言われたら戻るのが軍隊なんだよ。だから私は彼ら個人個人をバッシングできないよ。そしたらさ、揺れる私のふたつの気持ちがある。揺れるけれども、ふたつを受け入れている自分もいるわけよね。だから私は反対運動している人たちにバッシングされるけど、私は米兵一人ひとりを愛しているんだと。だけど米軍は嫌いだと言っている。黒か白かと人間決められるのかと。真ん中の灰色の人もいっぱいいるんだよと。それは決して悪いことではないし、人間はそんなに計算して生きられるもんじゃない。

38
紛争地に持っていく荷物検査をする上官。金武町（キャンプ・ハンセン）、1992年5月

39
明日はアメリカへ。実家で真由美・与座・バグウェルさん(22歳)。南風原町津嘉山、1994年12月

40

象のオリに知花昌一さんの支援者が押しかけた。しかし、周囲には柵が張りめぐらされ、防衛施設局の職員がしっかりとガードして中に入れない。読谷村（楚辺通信所）、1996年4月1日

41
大型輸送ヘリコプターが衝突し、墜落、炎上した。米軍はただちに構内に入り、事故現場の周辺を大学の許可なく勝手にロープを張り「立ち入り禁止」にした。学長や市長、警察さえも立ち入りを拒否した。大学側が抗議したが機体の撤去終了まで封鎖は続いた。宜野湾市（沖縄国際大学）、2004年8月16日

42
米軍機が「普天間飛行場」に降りていく。宜野湾市上大謝名、2009年7月

43
若い米兵を母親のように気遣うバー「スプラッシュ」のママ。金武町（新開地）、2010年3月

44
週末、米兵が「女を買い」に吉原の街をうろつく。沖縄市、2010年3月

45-51
ヘリ基地建設に揺れるシマ
The Community Shaken by Construction of Heliport
1996-

ここでの、「橋本とクリントン」についての言及は、1996年4月17日の日米共同記者会見を指している。

あの頃は、橋本とクリントンが握手して、普天間飛行場を返還しますと宣言して、沖縄の人はパンザーイ!と喜んだよ。そしたら、舌の根も乾かぬうちに「でも、代替基地は沖縄県内に造ってもらいます」と。これ、詐欺じゃない?　ただ宜野湾から名護に移るだけさね。辺野古は結構保守的な区で区の偉い人が受け入れたからね。もちろん反対する人もいて、その人たちが真っ先に立ち上がったわけ。ちょうどいいことに、私のばーちゃんは、辺野古の近くの瀬嵩（せだけ）という部落の出身で、私はばーちゃんの親類を頼って辺野古に入ることがスムーズにできたのよ。私は賛成派と反対派の両方に知り合いも親類もいるから、結構凶々しく入っていったんだよ。一方的に聞くマスコミみたいに辺野古の人を緊張させるんじゃないと、私は自分の意見もはっきり言って、相手とキャッチボールするから、相手も自分ごどんな人かわかるからより仲良くなった。それで「命を守る会」結成会のときに、写真を撮ったのが、唯一私だけだったわけ。そうしたらマスコミがいつせいに動き出したよ。初めて気づいてお前ら馬鹿か?と思ったよ。ただ私はニュースネタを出したいのではなくて、この連載だって、人間ドラマを出したわけ。いろんな人の思いをね。

45

嘉陽宗義さん（右）と金城正登喜・美重子さん夫妻。民間地域とキャンプ・シュワブの境界にバラ線が敷いてある。名護市辺野古、1997年1月15日

46
目の前が真っ暗になったので病院で診察を受けたら即入院。九死に一生を得た嘉陽芳子さん（71歳）。ホッとした夫の宗義さん（76歳）。「これ以上の僕の宝はない。これ（芳子）を奪うなって!」と妻を抱きしめた。沖縄市（中頭病院）、1997年4月15日

47
魚つりや潮干狩りに行く人々のために船を出す仕事をしている島袋利久さん（44歳）。ヒサ坊の愛称で呼ばれる「辺野古で一番の有名人」。名護市辺野古沖、1997年5月12日

48
「命を守る会」の結成(1997年1月) 当時からずっと先頭になって反対運動を引っ張ってきた金城祐治(1935-2007)さん(65歳)。疲れたり思い悩む日だってある。名護市辺野古、1999年10月18日

49
「クリスマス・チルドレンズデー」に辺野古の子どもたちを招待。名護市（キャンプ・シュワブ）、1999年12月

50
「辺野古ハーレー」に参加したキャンプ・シュワブの米兵たち。民間区域（辺野古）と米軍基地の砂浜を区切るフェンス（鉄線）をヒョイとまたいで帰っていった。米兵だけが通れる。名護市辺野古、2000年5月28日

51
旧暦3月3日、地域住民に基地を開放。名護市（キャンプ・シュワブ）、2002年4月

52-55

私の家族

My Family

2001-2005

石川は、2000年に腎臓がんと手術を、そして翌年の2001年に直腸がんの手術を行い、この時に、人工肛門になった。この時に医者からがんリンパ節の転移を告げられたが、写真撮影の続行のため抗がん剤治療を拒否した。同年退院後、名護に取材に出かけている。

人工肛門になったときに、一番初めに何を思ったかという、男とやれるかしら?　ということだった。病室でオナニーしたら感じたからホッとした。でも、退院して、鏡に映る自分の体は極端に変化しているわけ。クソを溜める袋をつけて。私は写真家だ

から当たり前に、自分で自分を写すことにしたの。それまで自分を撮る女の写真家とかをたまに見ていたけど、なんでいちいち自分を撮るんだ、と結構私は馬鹿にしていたのよ。ところが、いざ自分の体に変化したときにやったことが、自分で自分を撮ることだったわけ。だからその女の子たちもきっと何かあって自分を撮っていたんだなとそのとき理解したよ。

自分だけを撮っても飽きるから、自分の周り、そのときは娘一家と、娘と孫も住んでいたから、家族も撮ろうと思って、日常的に気楽に撮ったわけ。退院してすぐの写真は娘に撮ってもらって、次からは、デカイ姿見で、自分で撮ったわけ。ところがいちいち準備するのが面倒くさいときがあるから、途中から、ふたつ折りのガラケーで撮るようになったの。その方がいつでもどこでも撮れるとわかったから。そしたらカラーさね。それまではモノクロなんだけど、そんなのは全然気にしなかった。とにかくセルフポートレートは携帯で撮るに限ります。

私は人工肛門の手術をしたけど、うちの母親は末期がんになったのよ。母親が入院したら、だんだん足が細くなって歩けなくなるわけよね。まるで鳥の手羽先みたいになって、曲がってさ。母親の哀れな姿を撮ろうと思ったのよ。これは写真家のものすごく嫌なところだよ。本人は苦しんでいるのにさ、「お母さん、ちょっと撮るから」と言ってから、布団をとって撮ったのよ。親子が揃って、同じときに病気になっているわけよね。ふたつの体が醜くなっているわけよ。それでこの親子を出そうと。そういうときにはさ、自分のことなんだけど、まるで自分のことではないようにして、かっこいい言葉で言うと「ディレクター感覚」。あまりにも感情が入りすぎたら、写真を編集できないし、選べない。そういう突き放したところから見ると、この親子はおもしろいじゃないか、みたいな。

相手との距離は常にあるよ。たとえ自分の写真でも、娘、孫、友達、どんなに教しい人の写真でも。だから写真家は冷たいんだよ。

56-61 日の丸を視る目 Here's What the Japanese Flag Means to Me 1993-2011

この「日の丸を視る目」は、1993年から1999年まで100組を撮影、その後、写真集のために2007年に撮影を再開した。1999年に大阪、東京、奈良で展覧会を行い、2011年に未来社から写真集が出版された。

私は小学生の頃、「自分たちは日本人なんだろうか？　沖縄は日本の国なんだろうか？」と本当に思った。それがきっかけで写真家になろうと後々決めたんだよ。東京の写真学校に入って、すぐに思ったことがある。「私は何者なんだろう?」。それを知るためには、日本人を見てみようと思いついたの。ちょうど写真展とか講演で、日本の北は北海道から南は鹿児島まで行く機会がすごく多かったから、その用事を済ませたら当地に留まって、「私は日の丸のシリーズを撮ろうと思っています。紹介できる人いないですか?」と主催者に頼んで、紹介してもらうわけ。そして直接連絡先を聞いて、私が交渉して出してもらった。それを

撮りためたシリーズが「日の丸を視る目」という写真展に結実した。日の丸に対して日本人はいろんな思いを持っている。特にアジアの人たちを日本軍は虐殺してきた。アジアの人たちが最も嫌っている旗だ。だけど日本は別の旗に替えることなく、ずっと使ってきた。ヤマトの日本人に「日の丸をどう思いますか？　日の丸で日本の国を、あなた自身を表現してください」と頼んで撮ったらおもしろいのできるんじゃないか。被差別部落の人とアイヌ人と在日韓国・朝鮮人は、私が会ったことがない人たちだ。絶対入れようと思った。沖縄だって、日本人から差別されてきたわけだからさ。興味があったんだよ。入れないと意味ないと思って、いろんなツテを頼って、会いに行ったよ。結果として入れてよかったと心底思っている。

56 「読谷村で知花昌一さんが日の丸を焼いた時、私は考えましたね。戦前は『世界を照らす日の丸、世界は皆家族』と考えていた。しかし、台湾とって満州とってハワイもとうとうした“強盗の旗”であった。南京大虐殺の時も日の丸が揚がった。日の丸のために広島と長崎に原爆が落とされた。沖縄でも首里城をはじめ全て焼かれ壊されてしまった。みんな日の丸を揚げて焼かれてしまった。この赤い日の丸は、もう揚げるべきではない。生き残った人間の使命として義務として、緑の島を作らなければいけない。焼き払った“日の玉”ではなく“緑の旗”にしてもらいたい」(中央) 阿波根昌鴻 (93歳、沖縄県)、(右端) 謝花悦子 (56歳、沖縄県)、(左より2人目) 山城弘子 (29歳、沖縄県)、(右より2人目) 井上宗高 (20歳、本土出身)、(左端) 佐藤邦義 (19歳、本土出身)、沖縄県、1998年7月19日

57 満里さんは首から下が全身麻痺のポリオ（小児マヒ）による重度障害者だ。「『日の丸の白は民衆の骨、赤は血』という言葉があるが、それに尽きる。残酷な戦争は反対だが、人間の中にある残虐性を見ないといけない。演技をしたあと、悲しくなる。日の丸は見たくもない、触りたくもない」金満里（キム・マンリ、54歳）、劇団「態変」主宰者、大阪府大阪市、2007年12月7日

58 「波にのまれて、アップアップしている中で考えて、もがきながら心の前進をしたい。今まで、ただ楽しいだけで生きていた。そこで止まっている子もいるけど自分は違う。名護の子と日本の子といっしょに前に進みたい。海の中はなぜか安心する」大城若菜 (26歳)、演劇学校学生、沖縄県名護市、2008年6月8日

59 知恵「スッピンで人前に出たことがない。目の半分だけに化粧をした。化粧した自分は本当の自分か、わからなくなる。日の丸もどこに自分の意見をおいていいかわからない」加奈「大学のサークルで海外の貧困地に行くと、自分は日本だから生きていられるんだな、と感じる。『日本に守られている』『日本で生まれた』という思いで日の丸を体にまとった」篠原知恵

(右、23歳)、法政大学学生、須之内加奈 (23歳)、明治学院大学学生、沖縄県那覇市、2009年8月25日

60 性同一性障害医療ミス訴訟原告。「2006年に大阪医大で手術したが胸を大きく切られ過ぎて壊死した。裁判を起こし、近く和解勧告が出る予定だ。日の丸を半分に切ってまたいだのは大学で平和問題を取り上げたとき、学生が分断されてしまうから。傷痕を『日の丸の赤』で塗った。とても不気味なしたり。手錠は『日の丸・君が代』が人を牢獄につないでしまうような恐ろしさを表現した」(※2010年3月勝利和解) ヨシユギ (26歳)、立命館大学院生、京都府、2009年11月9日

61 「高3のとき、先生に教育の押し付けをされているようでいやだった。家から出られなかった。高校時代の青春を奪われたので制服を着けた。日の丸の奥には人を苦しめた血や屍骸が落ちている気がする。廃墟が自分の心を表わしている。今もずっと監視されている気がする」吉山森花 (20歳)、役場臨時職員、沖縄県中城村、2009年11月29日

62 森花一夢の世界 Morika's Dreams 2012-2013

石川は、恩納村の博物館でアルバイトしていた吉山森花と出会い、それ以降、森花を表現者として捉え、彼女をモチーフとした作品の写真集『森花一夢の世界』（未来社、2014年）を出版している。

森花は見かけは過激なんだけど、喋ったらとても丁寧でゆっくりと話すんだよ。そのギャップがおもしろかった。そのとき、ちょうど〈日の丸を視る目〉の撮影をしている最中だったの。それで森花に「日の丸で表現するシリーズに出てみないか?」と誘ったの。そしたらすぐオッケーしてくれた。森花は高校の制服を着て、股の間から出血しているわけよ。それでさ、「これは何?」と聞いたら、「戦争のときの慰安婦の血です」と言うわけ。処女の血を彼らが奪ったってことさね。その表現を大胆にやったわけよ。すげーなこの子とは思った。森花とも距離感はあるよ。距離感というのは、一心同体じゃないということ。森花は一生懸命やっているけど、撮るときに微調整するよ。私は写真に結実しないといけないから、森花にこっち向いて、あっち向いて、ぐらいは言うよ。

森花は結構強く主張する子だから、はじめは遠慮していたのよ。だけど最後は立きながら、「結局、自分がパフォーマンスしても真生さんの写真になるんじゃないか」「単なるモデルみたいな感じ」と訴えていた。「森花、そんなことないよ。森花もちゃんと出ているし、一対一だよ。だから、〈森花一夢の世界〉というタイトルで、ちゃんとふたりの名前を連名で出すからよ。印税も分けるから」とちゃんと話したら、森花はとても喜んでね。森花はプライドの高い子で、それぐらいやってくれているからさ、ちゃん

と立てないといけないことでしょう。私は先輩だから、私が先に出て、「石川真生×吉山森花」なのよ。

63-166 大琉球写真絵巻 The Great Ryukyu Photo Scroll 2014-

63-84 パート1 Part 1 2014
85-107 パート8 Part 8 2020-2021
108-130 パート9 Part 9 2021-2022
131-166 パート10 Part 10 2022-2023

この作品は、2014年から始まった。歴史的人物がしばしば登場するが、庶民の歴史を中心に据えていることでは共通している。今回は、最初のシリーズであるパート1に加え、沖縄以外では初の展示となるパート8、9と今年（2023年）の最新作パート10を紹介する。制作の動機について、石川は、次のようなメッセージをのこしている。

『大琉球写真帖』も、「大琉球写真絵巻」も、特別有名な人が出ているわけはなく、庶民の歴史。普通の人たちがどう動いているか、私の興味を持った人しか出していないわけ。王朝の人たち、偉い人たちだけとか、名のある政治家だけで作っているわけではないからさ。

絵巻のパート1は、琉球国に薩摩が乗り込んでくる直前から撮ろうということで、創作写真だったの。ところが撮る時代が近現代に入ってきたら、私が出したいと思う個人が出てきたわけ。それで個人に頼んで、自分で自分を演じてもらった。私は右向いて、左向いてという微調整しかしていないの。パート7は、このシリーズでは初めて宮古島、石垣島、与那国島で撮ってきたけど、個性の強い人たちがいっぱい出て演じてくれたの。ただ私はこだわりがあって、1点でもいいからできるだけ沖縄戦のことを出す。もうひとつは、従軍慰安婦にさせられた人たちを出したいということが強くある。ただ私が他のものを入れてしまったために、それが出せる年と出せない年があるけれどもね。ふたつのテーマは意識している。そこが私の原点だからさ。創作写真ではあるけれど、ドキュメンタリー的にその人を撮っているものもある。計画を立ててやることはなくて、むしろ、未来にどういう人に会うかということを楽しんでいるものが多い。動いていたら、必ず出会いはある。そういう方がずっとおもしろい。

パート1 2014 63 ウミンチュ（漁師）が魚をいっぱい釣って来た。（琉球國時代）

64 イモの収穫。豊作を喜ぶハルサー（百姓）。（琉球國時代）

65 「薩摩よ、来るな!」。祈るカミンチュ（神人）。

66

1609年3月、徳川幕府から「琉球征討」を許された薩摩藩が3,000人の軍勢で琉球に侵略。奄美群島を次々に征服。4月に首里城を占拠。琉球は降伏した。薩摩藩は幕府から琉球の支配権を承認され、奄美群島を割譲させ直轄地とした。琉球國は薩摩の支配を受ける一方、中国との冊封（王の承認）・進貢（中国皇帝に貢ぎ物を献上）関係を続けた。

67

「琉球処分」。1879年3月27日、明治政府の処分官・松田道之が軍隊や警察など約560人を率いて琉球へ。首里城で「琉球藩を廃止、沖縄県とする」と布達。500年に及ぶ琉球國は崩壊し、日本に併合、沖縄県となる。国王尚泰は東京在住を命じられた。

68

琉球の元役人たちは島ぐるみで抵抗運動を続けたが、逮捕され拷問を受けた。明治政府による琉球人への徹底弾圧は1894年の日清戦争まで続いた。

69

謝花昇は元薩摩藩士の県令（県知事）・奈良原繁と対立。役人を辞めて明治政府と県令に対抗し、民権運動の中心人物に。1901年、旅先の神戸で発狂し、その後病死した。

70

1944年3月、沖縄に日本軍第32軍創設。以後、南西諸島に約143カ所の慰安所が設置された。沖縄人、日本人、朝鮮人、台湾人の慰安婦は全体で推計1,600人前後いたという。

71

沖縄戦。1945年3月、米軍がはじめて慶良間諸島に上陸。4月、本島に上陸。沖縄人の多くが家族を殺された。捕虜収容所に入れられている間に、家や田畑は米軍基地として強制接収され、集落ごと転移させられた。

72

沖縄戦。1945年6月、糸満の摩文仁の海岸まで米軍に追いつけられた日本軍。県民の4人に1人が殺される悲惨な戦争だった。

73

沖縄戦。1945年6月、米軍から逃げ延びる途中で家族全員が殺され、たったひとり生き残った子ども。戦争孤児は約1,000人いた。

74

1950年代、米軍は強制的に住民の家や田畑をつぶし土地を取り上げ基地建設を進めた。「向こうに自分たちの畑がある。行かせてくれ」。懇願する農民。

75

米軍統治下の沖縄。米兵による強姦が多発。生後9ヶ月の赤ん坊から年寄りまで見境なく女性を襲った。なかには殺される者もいた。犯人の米兵は米軍により逮捕され軍裁判にかけられるが、無罪になったり逮捕されずに本国へ逃げ帰った。記録では「処罰の方法不明」だらけ。おとがめなし、ということだ。

76

琉球國の日本への併合後、学校や家庭で同化政策が進み、ウチナーグチ（沖縄語）が禁止、「標準語」を話すよう教育された。それは1945年の敗戦後も継続、「方言札」は1960年代まで続いた。

77

「沖縄の祖国復帰を願う平和行進団」がやってきた。学校では教師が日の丸の小旗を生徒に持たせ、沿道で行進団を出迎えた。

78

「落ちる、危険だ」といわれる輸送機オスプレイを、米軍普天間飛行場のフェンスに隣接する民家の屋根に落としてみた。パイロット役は演芸集団FECで「お笑い米軍基地」の脚本を担当する小波津正光さん。基地の中にオスプレイの格納庫が見える。

79

2013年11月、自民党本部。「米軍普天間飛行場は県外へ」と公約して当選した沖縄の国会議員5人を従え、辺野古移設で（5人と）合意したと記者会見する石破茂幹事長。

80

2014年1月、名護市長選で「自民党が推す候補者が勝ったら、500億円の名護振興基金を新設します」と、名護市民にカネをちらつかせた石破茂自民党幹事長。防衛省の辺野古埋め立て申請を許可した仲井眞弘多知事に「不承認」をつきつける、再選された稲嶺進名護市長。「違法な反対運動の妨害活動に警察と海上保安庁の積極的な対応が必要」と、島尻安伊子参議院議員が国会で政府に要求。

81

名護市の米軍基地キャンプ・シュワブ沖合に、県民の反対を尻目に新基地建設に向け防衛省が工事を強行中。

82

安倍晋三首相が憲法9条を無視し、国会での議論もなく閣議決定だけで「集団的自衛権」を推進。

83

やりたい放題、いいたい放題。沖縄にどんどん基地を押しつける安倍晋三首相と石破茂幹事長を、沖縄人が魔よけのシーサーを先頭に追い出そうとしている。（名護市辺野古の浜にて）

84

「沖縄に災いを持ってくるな〜!」と、日本に向かって祈るカミンチュ（神人）。

パート8

2020-2021

85

「カヌーチーム辺野古ぶるー」

【鈴木公子、62歳】

塩川港へのベルトコンベヤーの設置許可。琉球セメント構内への赤土仮置き許可。一企業へ便宜を図り工事促進に加担する役所。赤土の海上搬送に関してだけでも、安和棧橋の目的外使用の違法。赤土で辺野古を埋め立てる違法。護岸を棧橋として使う違法。数々の違法に対して、法的強制力のない「行政指導」という曖昧な対応しかない県。ハンガーストライキで、遺骨の混じる土で辺野古を埋めるな、との県民の訴え。業者の採掘を許す「措置命令」しか出さない知事。

曖昧な対応しかない県政に、防衛局は無法に違法の限りを尽くして工事を強行している。毎日、大型の運搬船で10tトラック2,000台近い赤土を大浦湾へ運び込み、辺野古の海に投げ込んでいく。

この、赤土の山を目の当たりにして、工事現場に立つ私たちの怒りと悲しみを想像できなければ、「あらゆる手段で辺野古新基地建設を阻止する」など絵空事でしかない。（2021年6月3日）

86

「カヌーチーム辺野古ぶるー」

【鈴木公子、62歳】

東京から沖縄へ移住してまで何故、カヌーを漕ぐのか、とよく聞かれる。現場に一番近い場所で、殺されていく海を見つめ、その現実を受け止め、工事を止めたい。それが、カヌーを漕ぐこと。私たち手漕ぎのカヌーは乳母車。海保のボートは戦車に等しい。

圧倒的な機動力と物量の差がある、海上保安官という権力の暴力装置を使わなければ、「辺野古が唯一」、という政策を維持出来ない、醜悪なスガ政権に対して、私が持てる武器はカヌー。カヌーの切っ尖は、スガに向いている。（2021年5月2日）

87

「子どもの命の問題です」

【与那城千恵美（48歳）、心丸（7歳）、太丸（10歳）】

2017年12月、当時3歳だった娘の通っていた緑ヶ丘保育園へ米軍機部品落下があり、その6日後、普天間第二小学校へ米軍機窓枠落下事故がありました。今年、娘は保育園を卒園し普天間第二小へ入学。子どもたちは成長しますが、沖縄はどこへいっても危険性は変わりません。緑ヶ丘保育園の場合は、米軍が落下を認めていないため、何の対策もなされませんでした。普天間第二小の場合、米軍が落下を認め謝罪し、「出来る限り小学校の上空を飛行しない」と答え、国も監視カメラや米軍機へ学校だと知らせる赤いランプを5つ設置。また、米軍機が飛行時に避難するための「避難シェルター」も造られました。

しかし、それらは全く意味をなさず、学校上空を米軍機が何事もなかったかのように飛び交っています。また、危機管理能力を高めるため、米軍機がきたら「見て、聞いて、止まって、怖いと思ったら逃げましょう」と学校は子どもたちに伝えています。

私はこれから、娘を守るため、子どもたちが当たり前な安心安全な学校生活を送れるようになるために、小学校でも声を上げ続けます。戦後76年も基地があり続ける沖縄で、基地問題ではなく「子どもの命の問題」として、子どもたちと一緒に楽しみながら考えるイベント「ことりフェス〜お空を飛ぶのは小鳥さんだけがいいな〜」を県内の女性有志で開催しています。その思いを込めて、鳥さんを入れました。「基地＝生活の問題」として、普天間基地の周りに住む住民として、フェンスを背景に入れました。オスプレイとヘリのマスクに×は、「毎日煩いから静かにしてちょうだいね〜」という表現です。どんな状況でも、ママたちは怒りや悲しみだけではなく、未来を見据えて明るくまっすぐ前向きにこの問題に取り組んできました。その未来への明るさも表現しました。（2021年3月26日）

88

「埋め立ての海から愛される海へ」

【大山盛嗣、44歳、技術士（環境部門）】

西海岸道路の開通と、パルコの開業で、浦添の海は多くの人に愛される海になりました。干潮時には子どもたちが泳いでいたり、干潟を散策する人もいます。夕暮れ時には多くの人が慶良間に沈む夕日を眺めに訪れます。この海に必要な性の低い軍港を建設するなんて信じられません。

これからも更に県民や世界中の人に愛される海になるように、メガホンを持って、誰より高くジャンプしながらこの海の大切さを訴えていきたいと思います。楽しい場所には人が集まり、人が集まれば政治を動かすこともできます。海の素晴らしさに気づいてくれた、たくさんの人たちと一緒にこれから海を守る活動ができたらと思います。（2021年6月13日）

89

「呪縛から抜け出し、新しい沖縄へ」

【伊禮悠記、42歳、前浦添市議会議員】

気づかなければ外すことのできない鎖・沖縄の呪縛に気づいてほしい。沖縄は長年基地問題で苦しめられてきた。戦争を経験したおじいやおばあ、仕事の関係などしがらみのある現役世代、生まれてから基地の存在が当たり前だった若者の間では、温度差があるのも事実。年齢や性別に関係なく、沖縄では現状を変えようと立ち上がりたたかう人、その不条理に気づきはじめて人、無関心な人、様々な立場に立つ人たちが存在する。権力者によって押し付けられる沖縄の不条理に対し、2021年2月の浦添市長選挙は、「軍港建設に反対」「自然豊かな海を守り、子どもたちの未来に残したい」その一心でたたかった。写真は、埋め立てが計画されている浦添西海岸の海で撮影している。沖縄の呪縛を鉄網状柄の着物と鎖で表現し、その呪縛から抜け出そうと、自ら鎖を引き剥がそうとする人、その様子に気づき始めた人（タコ取りの男性と釣りの女性）、無力感や焦燥感で思い悩む若者、気づかずにのんびりと海を楽しむ人たちを表現した。沖縄の基地問題の呪縛・鎖は、県民がひとつに

なりたかえば、自らはずすことができる、解くことができるのだと伝えたい。沖縄に生きる私たちの権利を奪う権力者に一緒に声を上げてほしい。(2021年6月13日)

90
【高橋千恵、49歳、鍼灸師】【山口京子、62歳、自営業】
与那国島

【高橋千恵】自衛隊基地が造られた南牧場に居る馬たち。この馬たちは純血の与那国馬ではなく、雑種だ。以前、人間の都合で食用馬にしようと、純血の与那国馬に他の種類をかけた。だけど、言い出した人は島外へ出て行ってしまい、結局、この計画は中途半端で終わった。でも南牧場の中では自然交配が進み、もう純血種には戻れなくなった。それでもまだ、基地が出来るまでは馬たちは静かに暮らせていた。錆びて壊れていたけど厩舎があって、晴れた日は日陰になり、雨の日は雨が避けられた。小さいけど水飲み場もあった。夕方になると、この場所に馬や牛たちが集まるが多かった。だけど自衛隊基地の工事が始まって、この場所は全部壊され、彼等の休息する場所は無くなってしまった。もちろんエサとなる芝のある草地もかなり減った。工事中、毎日のようにコンボが作業してるエリアで、馬や牛たちは佇んでいた。元々そこは彼等が帰る場所だったから。彼等が住んでいた場所を、人間の都合で奪ったのだ。食用だった牛たちは、全て何処かへ売られていったが、馬たちは在来種としての価値が無い為、売れることは無い。一応、馬主は居るが、繁殖や出産、怪我や病気になっても、何もせずの放置状態。炎天下の中でも日陰は無く、台風の時でもアダンの林に身を隠すだけ。エサもほぼ生えてる草なので、殆ど野生の状態だ。この地域は気温が上がると、何故か蠅や蛇が増える。蛇は馬たちを刺し、痒くて搔いた所が小さい怪我になり、そこに蠅がたかることでまた傷を掻き、更に深い傷になる。寒くなり虫がいなくなるまで、それはずっと続く。そもそも、こんな小さな島に最初から馬が居るわけが無く、文献こそ無いが、人間の都合で連れてこられたであろうことは、想像に難くない。ずっと人間の都合に振り回されてきた馬たち。彼等に謝っても意味は無いのは理解するけれど、謝らざるにはられない。そして、どんな環境になっても、淡々と生きている彼等の強さに、尊敬を感じずにはられない。

【山口京子】「戦わないで仲良くしよう」。この自衛隊駐留5年目の与那国島。いつも一緒に戦ってきた、今は亡き彼の残した言葉です。

国と国が戦わないで仲良くしよう。島の住民が争わないで仲良くしよう。そうになったら、本当にもっとうまくいく……と思うのですが。40年前移り住んだ与那国は一つの国のようでした。与那国の人は、どなんと(与那国人)であることに誇りをもって。田畑を耕し、精を出して、働き、ゆいまーるで互いの畑を手伝って、子供たちを育て上げ。

その与那国は、今では軍隊を受け入れて基地の島となり、日本・アメリカの思いのままです。田畑は荒れて、自治の力はそがれました。自衛隊による島の活性化などは絶対にあり得ない絵空事です。(2021年6月11日)

91
【狩野史江、61歳、民宿経営】【山田和幸、69歳、畑人】
与那国島

【狩野史江】「～Tシャツの意味～」ぼんたどうなんちま(私たちの与那国島)かていらぬん(捨てられない守っていこう!)
『基地が出来る前の思い』
平和な与那国島。牛と馬がのどかに共存し「Dr.コトー」で一躍有名になった海を望む南牧場。町民も観光客も大好きな場所に自衛隊基地を造らせてはならない。絶対阻止!!
『基地が出来てからの思い』
牛がいなくなり、レーダー基地と軍車両が我が者顔で建ち並び迷彩服の自衛隊員が闊歩する異様な南牧場。クラクションを鳴らされ盛大な打ちあげ花火やドローンの訓練に驚かされる馬たちに心が痛む。時折道を封鎖してストライキしているのは馬たちのストレス発散なのか。その上、電子部隊で軍備増強などすると余計に狙われる。平和外交で安心して住める島にしてほしい!
【山田和幸】太い潮流の流れに浮かぶ“まるんな”の島。アジアの人と物が交流する島の魅力を手放してはならない。(2021年6月11日)

92
「非力でも守るために闘う母」
【比嘉さん一家、トシ子(79歳)、マリア(52歳)、リナ(14歳)、エリ(12歳)、飛推(10歳)】

米軍キャンプ・ハンセンの街で母とふたりで暮らした幼い頃、十数人の米兵たちに襲撃された。警察に救助要請するも叶わない絶望の中で娘だけは守ろうと鬼の形相で知恵をこらし籠城をつらぬき闘い続けた母を今でも覚えている。その体験を元に、私と子どもたち(孫)が母を守る姿を表現した。

私が手にしている細いヒモは、かつて母が籠城の闘いで使った家電のコードを表している。

子どもたちもおばあちゃんを守るのはオレたちだと意気込む。あの日母が闘ったからこそ私があり、孫たちにつながった。(文章：比嘉マリア、2020年11月7日)

93
「二人三脚」
【仲西智春、雅江夫妻】

智春(72歳)さんは、6年ほど前から車いすを利用している。週3回のリハビリや、年に一度開かれる米軍新基地建設に反対する「障がい者辺野古のつどい」にも、自分一人で車を運転して行く。人と語り合うことが好きなので、時には町の天ぷら屋さんで、「食べながらユンタクしたい人はどうぞ参加してください」と「天ぷらサミット」を開催している。Facebookでは、「体を動かさないとだめになる。リハビリがんばるぞ、オー!」と日々、発信を続けている。仲西さんは原因がまだよくわかっていない難病、脊髄小脳変性症の闘病中だ。若い時はスプリンター(短距離走者)で、実家があるうるま市昆布区の区長も務めていたが、40歳頃から徐々に歩けなくなっていった。あちこちの病院をまわっても原因がわからず、病名が判明したのは64歳のときだった。リハビリをうんと重ねても、元のように歩けるようになることはない。

だが、「これ以上悪くならないように、自分でできる分は自分でやろうと思っている。ガンク(頑固)だから」仲西さんはあきらめず、いつも元気だ。「本当にあなたは暗くならないの?」と聞くと、「ならないです。落ち込んでしまったら、『もう自分はだめだ』って思ったらだめになるから」と言う。

東京から昆布区の仲西家に嫁ぎ、幼い二人の娘を育てながら書道教室などを掛け持ちし、仲西さんを支えてきた妻の雅江さん(69歳)も、「(夫は)やりたいことがいっぱいあるしね」と笑う。最後に仲西さんにもう一度、「なんでそんなにがんばっているの?」と聞いた。「寝たきりにならないためです。寝たきりになって、こっち(妻)に迷惑かけちゃいかんってね。そういう思いやりです。」(インタビュー:石川真生、文章構成:山内優希、2021年6月26日)

94
「W節ちゃん」
【上地節、94歳、山里節子、83歳、いのちと暮らしを守るオバーたちの会】

いつもいっしょの二人を会のオバーたちは「W節ちゃん」と呼んでいる。父親が早くに亡くなった上地節さんは小さい頃から苦労してきた。

親を少しでも助けたいと、あちこちのお店のお手伝いさんをしたり、年を取ってからはガスの集金人など、いろんな仕事をしてきた。

「オバーたちの会」代表の山里節子さんは家が近所がよく知っている仲だ。二度と戦争はしてほしくないという思いで「オバーたちの会」に入った。会の活動がある日、「W節ちゃん」は山里節子さんの車に乗って移動する。(2021年3月31日)

95
「基地いらないチーム石垣」
【上原正光、68歳】

石垣島平得大俣地区の陸自ミサイル基地建設反対運動に参加している中島佐和子さん(東京出身)は無類の猫好きだ。そんな佐和子さんは大都会での生活に疲れ、会社を早期退職して石垣島の海が見える“終の棲家”に数匹の猫たちと平和な日常を送っていた。2019年3月1日の国・防衛省、沖縄防衛局による造成工事の強行で一転した。市民有志で発足した旧ジュウマール・ゴルフ場ゲート前での抗議と監視活動へ身を置くようになった。監視活動への参加者が少なくなった現在も、彼女は一人でも監視テント内で週2回午前9時頃から正午まで、工事関係車両の出入チェックする地道な活動を2年以上も継続している。

私が現場周辺で撮った写真やドローン空撮映像と、佐和子さんが記録した車両チェックノートを突き合わせながら建設工事の進捗状況を二人で話し合っ、基地反対市民グループへ情報提供を行いながら、どうしたら石垣島に軍事基地建設を阻むことが可能か日々模索、行動している。必要な事柄を“阿吽の呼吸”で実行する運動が問われている。今年5月、監視活動中に民族派右翼団体を名乗る6人組から「テント小屋を撤去しろ!」とか「6・23には全国動員して来るからな!」など罵声と恫喝されたが、それに怯むことなく「車の排ガス止めてよ!」の一喝した“胆が座った”態度には敬服した次第。「私は兎に角にも基

地を造らせたくないだけ、難しいことはどうでもイイ」と言い切る人は、この石垣島には貴重過ぎる相棒、同志である。2021年6月16日に数の力で強行採決された“稀代の悪法”「土地規制法」の施行によって、琉球弧の島々が再びヤマトの捨石、人間の盾を拒否する闘いを再構築しよう!(2021年6月9日)

96
「石垣市住民投票を求める会」代表

【金城龍太郎、30歳】
小学生の頃から、同級生は遊んでいるのに、自分は畑の手伝いをさせられていた。海外に住みたいと思ってアメリカに行った。大学を出てスーツにネクタイ姿に憧れてサラリーマンをやっていたが、仕事に自信が持てなかった。沖縄に帰ってきて農業を始めた。周りから両親が喜んでいると聞かされた。今は親と一緒に「フルーツ園金城」を経営。マンゴー、アセロラ、アテモヤを栽培している。(2021年4月3日)
「裁判について」

石垣市の自治基本条例を根拠に、僕たちはそれを上回る1/3以上の署名を提出しましたが、僕たちが求めた住民投票は未だに実施されていません。石垣市長には住民投票の実施義務があるかどうかを裁判所に聞いているところです。(2021年4月3日)

97
「石垣市住民投票を求める会事務局」

【伊良皆高虎、30歳】
小学生の頃、居残りで宿題をやらされていたら親父が乗り込んできて、顔をパンッ!と叩かれて家に連れていかれた。「伊良皆さん。やめてください!」と校長が止めても聞かなかった。小さい頃から畑仕事を手伝われていた。お茶農園「畑里(はるさと)」を営んでいる。お茶の原料は野原に咲くサンニン、パンシルー、桑、イヌビロ、長命草、琉球松、レモングラス、ウッチン、ノニの葉っぱ。味にこだわって作っている。(2021年4月3日)

98
「石垣市住民投票を求める会事務局」
【宮良央、30歳】

三線をやっていて、伝統芸能、獅子舞、青年会長もやって地域行事に関わっている。祖父も父親も牛飼いだ。東京農大を出て、徳島の大きな農場で3年修行していた。石垣に帰ってきて両親がやっている「宮良牧場」で働き始めた。

成果が出て牛がおいしい値段で売れた時、石垣牛で納得のいくお肉になった時、幸せを感じるよ。八重山は生きたまま牛セリにかけて売るのが主だが、僕は子牛をセリに出すか、お肉として出すか、悩みながら好きな畜産を楽しく営んでいる。(2021年6月10日)

99
「恩納村の献花台」
【吉田勝廣、73歳】
2017年5月19日、娘が遺棄された場所で献花を始めてから、

花束、ぬいぐるみ、飲み物、線香、手紙等を整理する度に突然命を奪われた本人の悔しさ、両親の憤りが私の心を揺さぶります。多くの県民、本土、外国の方々も献花、お祈りをさせていただきました。皆様も同様な気持ちだと思います。ウチナンチューは「命（ぬち）どう宝」、命を守り育てることを何よりも大切にしてきました。しかし、ウチナーでは未だに突然命が奪われるなど、不条理が続いています。ユルチェナイピラン（許すことは出来ません）。不条理が存在する限り、ウチナンチューの世直しは続きます。そのために私たちはイチャリパチョウデー（世界の人々と固く手を結び）「繰り返させない」「忘れない」「決意、自分が出来ること」をやり遂げることがウチナンチューのチムグクルです。最後に、彼女のお父さんが涙を浮かべ私に語りました。「私が生きているのは子どもの供養のためだ」と……。 (参加者：宮城千恵、テグズマンハナ、2021年4月28日)

100
「チームあかばなあー」
【上野さやか、41歳】
楽しそうに遊ぶ親子や音楽に合わせてストレッチする老若男女。帰りの着替えなど気にせず海に飛び込む子どもたちの姿は、少し前まではあたりまえの景色だ。

2019年冬、生活は一変した。コロナウイルスの影響を受け、あたりまえが奪われた。コロナ禍の影響が出る少し前の9月、あたしたちは学習会を重ねていた。メンバーは、団体職員、写真家、活動家そして情報整理のためマスコミの友人にも参加してもらった。議題は、同年4月13日に起きた「北谷町女性殺害事件」。事件後、すぐに広がったのは「男女交際のもつれ」というキーワードだった。しかし、被害女性の友人たちの証言や追取材も加わることで、その事件は単なる男女交際のもつれではなく、加害者の一方的な感情により、被害者の人権が奪われた殺人事件であるということが見えてきた。ただ、真実はあまり広がらなかった。反対に「こんな被害者だから仕方がない」と、被害者側に責任があるような一方的な情報も目にするようになった。この間違った情報を正し、被害者は決して悪くないという想いの共有。そして何よりも「同じことを繰り返さないためにできること」を考えるため、命日に合わせて追悼集会の開催を意思し、実行委員会「チームあかばなあー」を結成した。

しかし、コロナ禍の影響は大きくなり、会場内や大人数での集会の開催が難しくなった。それでも、彼女の身に起きたこと、そして被害者が責められない社会を作るため、「何かしなくては」という思いから、サイレントスタンディング（ただ立ち続け、想いを共有する時間）を行うため、2020年4月11日、あたしたちはまだ人もほとんどいないアラハビーチに集った。あれから1年。2021年4月13日、残念ながら集会を持つことは厳しい現実だが、せめて昨年と同じことが出来ればと、仲間たちに声をかけ時間を共有した。ビーチに集う人の姿は去年よりも圧倒的に増えていたため、不思議そうにこちらを見ている人も多かったが、追悼集会では優しいお祈りの後、それぞれが感じている想いも少し語り合った。会の途中、遊び疲れた親子が東屋の下でジュースを分けていた。被害にあった彼女も、このビーチで子どもたちと一緒に同じような時間を過ごしていただろう。そしてその時間は続いていくものだと感じていただろう。「繰り返してはいけな

い」「あなたは悪くない」。彼女に想いを馳せながら静かにサイレントスタンディングを続けた。(2021年4月11日)

101
「ミサイル基地いらない宮古島住民の会」
【清水早子、72歳、事務局長】
この島で暮らした26年。珊瑚礁の海の中は明るく、落陽の夕景は美しく、変わらずに老いてゆく心を和ませてくれるけれど、我が子も島の子たちも巣立ち、やって来たのは、迷彩色の軍隊とミサイル。金と権力に群がる人々と白亜の空虚な建物が乱立し、ざわわ風吹く畑が消えてゆく。今日も虹色の旗を掲げて、拳を上げて、叫ぶしかない。私の「島の時間」を返せ！と。(2021年4月8日)

102
「前宮古島市長下地敏彦、贈収賄罪容疑で逮捕!」
2015年5月11日、当時の防衛副大臣が前宮古島市長下地敏彦に「陸自配備計画」を告知しに来て以来、宮古島の陸上自衛隊駐屯地建設反対運動は始まった。その4か月も前に、下地前市長は、経営破綻していた千代田CCゴルフ場の社長と結託し、防衛省へゴルフ場用地を売り込み、8億円の血税で国・防衛省は購入。ゴルフ場がミサイル基地になった。下地前市長は見返りにゴルフ場社長から650万円をもらった贈収賄罪容疑で、2021年5月二人は逮捕された。

数々の疑惑のあった下地前市長。やっと逮捕されたと多くの市民は思った。やっぱり、基地建設は「利権の温床」である。前市長は度々、こう言って自身の説明責任を果たさなかった。「国防は、国の専権事項だ」。だが、実は「私腹を肥やすのは、私の専権事項」だったのだ! (文章：清水早子【ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会事務局長】、2021年6月15日)

103
「工事車両を止める」
月曜から土曜日までの毎日、保良の住民が早朝から正午まで、「陸上自衛隊保良訓練場」に出入りする工事車両を止めている。少しでも工事を遅らせようと、ミサイル配備抗議行動をしているのだ。

車両は出て行ってもまたすぐに土砂を積んで戻ってくる。だから出て行く車両も止めるのだ。この二人に下地博盛共同代表を加えて、薫さんが「保良の三銃士」と命名した。(2021年4月6日)

104
「ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会」
【下地薫、67歳】
これまで「なぜ反対運動をやるのか」という質問をたくさん受けました。多くの彼ら彼女らの質問は「どうせ造られるんだから抗議活動しても無駄」というものです。「国に楯突いても勝てない、抗議活動して何になる」と言ってくる人に対する下地博盛共同代表の言葉は強烈でした。「これは生き様の問題です」。決して恵まれていると言えない過酷なこの辺境の地で生きてきた人々の歴史と誇りを思うと、とことん寄り添いたいと思う。本来

は豊かな自然に恵まれた島がどんどん壊れていく様相を見るのは耐えられません。情けないほど非力な私たちにできることは当たり前島の普通の生活を営む権利を主張し続けること、国による暴力を発信し続けることで、ここで起きていることを可視化する、終わりの見えない活動ですが淡々と取り組むしかありません、自分の信念に従って。(2021年6月7日)

105
「家族で抗議行動」
【下地博盛、薫夫妻】
夫の博盛さん(71歳)は「ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会」の共同代表だ。妻の薫さん(67歳)と共に訓練場のゲート前抗議行動に毎日立っている。薫さんはスマホを肌身離さず持っていて、毎日抗議行動をしながら、「保良だより」をスマホでネット配信している。「今日は何台工事車両が入った」「自衛隊が射撃訓練をしている」「どこそこで工事をやっている」「今日は誰々が応援に来た」などなど。「保良だより」が拡散され各地からやってくる訪問者が増えている。(2021年4月5日)

106
「朝の風景」
【下地茜、42歳、宮古島市議会議員】
私の住む保良では陸自弾薬庫の配備が決まってすぐ地域の反対決議を出すなど、配備反対の意思を示してきました。私の父が住民代表として地元での反対活動を粘り強く続けていますが、一方で工事は着々進められていきます。表立って顔を出すことができない人がほとんどという中で、地域の人の心をしっかり結び付けていくために、地域から反対を表明する市議が出ることは大きな意味があると思いました。帰郷した4年前は、のんびり田舎暮らしを楽しみたいと思っていましたが、降ってわいた配備の話に奔走させられています。弾薬庫の話がなければ、市議会議員になることもなかったと思いますが、これをきっかけに、かつて市議を務めた父の地盤を継ぎ、生き様を継いでいるという気持ちでいます。弾薬庫のゲート前に座る地元の人や母や応援の人たちと、畑の話、海の話を通して、島のことや生活の思想などもまた、受け継ぐ場になっています。活動の中でそれぞれの生き方が交差して、形は「反対運動」ですが、根っこはこの島での生き方への問いかけに繋がっていると思います。反対運動の先に、配備撤廃までたどり着けるか分かりませんが、現状をどこまで変えていけるか、ひとつひとつ階段を上っていくことを大切にしたいです。ヤギは1歳です。生まれた時から足を引きずって隣に飼い主が困っていたので、半年ほど前に譲ってもらいました。(2021年6月7日)

107
「黒人に誇りを持って生きていく」
【親富祖家、大輔(40歳)、愛(38歳)、ティーダ(10歳)、ユンダ(9歳)、ニヌファ(5歳)、カナヨー(2歳)】本部町
私が、私も日本の中のうちなんちゅだと言うと、いやいや、違うよね、と言われつづけ、私がもう日本人には思われたくない、私はアメリカ人でブラックだと振る舞うと、いやいや、日本人らしくしなさい、と言われる。息子のティーダが学校の

同級生に「ティーダってアメリカ人のくせに自分では日本人って言うよねー」と、言われたらしい。ティーダは「はあ? アメリカ人じゃないよ、黒人だよ」と返したらしい。黒人に誇りを持って生きていこうと、息子は成長しています。#okinawa #blacklivesmatter (文章：親富祖愛、2021年6月27日)

パート9 2021-2022
108
「負けないぞ〜!!!」
【与那城守(47歳)、千恵美(49歳)、太丸(11歳)、心丸(7歳)】
私(与那城千恵美)は、産まれも育ちも普天間で、基地があるのは当たり前でした。しかし、2017年、当時3歳だった娘の保育園へ「米軍機から部品が落下した」と連絡を受けた時、頭が真っ白になり、体が震えて涙が止まらなくなりました。その瞬間、魔法が解けたかのように「私たちはこんな危険なところに住んでいたんだ」と気づき、「子どもの学校の上を飛ばさない!」とママたちと共に#コドソラ(子どもの空を守る)として活動を続けています。普天間では様々な米軍機が昼夜問わず飛び交い、1日に何十回と飛行する日もあります。それがあまり知られておらず、現状を伝えるため、飛行時間と飛行動画をSNSに投稿するようになりました。この場面は、戦闘機が低空飛行する時、騒音慣れている子どもたちでさえ耳を塞ぎ、ネコたちは恐怖で固まる様子を表現しました。最初は、オスプレイの前で、私が飛行時間を記録しながら子どもたちを守るように立ち、子どもたちは耳を塞ぐポーズで撮影していました。途中から、真生さんが「好きなポーズやっていいよ!」と声をかけると、子どもたちがオスプレイの前に行きファイトポーズをとり始めました。とても意外でした。これが子どもたちの本音なんだな……。私が守らないといけないと思っていた子どもたちは、事故から5年を迎え、とても強くたくましく成長しているなと心強く思いました。これからも、米軍にも日本政府にも負けないぞ〜!!! (ネコ役は、表現力豊かな#コドソラ仲間の宮城智子さんがやってくれました。感謝!) 文章：与那城千恵美、2022年4月17日、宜野湾市大謝名民家の屋上)

109
【中村之菊、42歳、沖縄の米軍基地を東京へ引き取る党代表】
2016年6月から沖縄に通っている。この約6年の間に多くの人に話を聞いて、現状を見てきたが、通い始めたころとは全く違う感情をいま持っている。通い始めたころは、沖縄の人々と共に日本政府に対して「怒る」ことをしていたが、いまは日本政府だけではなく、「沖縄ががんばれ」とただただ言うだけの他人事な本土の人々に強い違和感を持っている。例えば、「沖縄を返せ」という歌がある。沖縄の人々と共にこの歌を歌う本土の人を見ても全く何も感じなかったし、むしろ好感さえ持っていた。しかし、通い始めて2年が経つ頃に沖縄の人々が「沖縄を返せ」と訴える先には、紛れもなく自分自身を含めた本土に対しての思いだと感じたので、それを共に歌うことは基地を押し付けている当事者としての責任が全くないのではないかと思うようになった。50年前の米軍施政下で当時の行政主席である

屋良朝苗主席は「復帰措置に関する建議書」を作成した。そこには、「新生沖縄」の思いが込められており、これに答える本土が存在していたならば、選挙で前面に沖縄の現状を変えようとする議員が存在していたであろうと思ったが、50年間そうした人は一人もいなかったことを知り、更には今年の1月の名護市長選後に、「また頑張ればいい、次があるよ」と沖縄の人々に語り掛ける議員の姿を目にし、「いつまで沖縄にばかり頑張らせるのか」という思いに至り出馬を決意した。「沖縄の本土化」が「本土の沖縄」という言葉や、あるいは「本土にいらぬものは沖縄にもいらぬ」という言葉が「沖縄にいらぬものは本土にもいらぬ」という言葉に捏造されている今、こうした歴史の捏造を食い止めて、本土にあった基地を沖縄が引き取ってきて犠牲にあり続けていることの再確認を促し、本土が責任をもって沖縄に押し付けてきた基地を回収することを訴えていきたい。普天間の運用停止・返還と辺野古新基地建設の中止を実現したい。(2022年4月16日、宜野湾市沖縄国際大学屋上)

110

「3回目の追悼集会」

【上野さやか、42歳、チームあかばなあー】

3回目の追悼集会。北谷町桑江で在沖米海兵隊所属の海軍兵が日本人女性を殺害し、自身も自殺した事件が2019年4月13日に起きた。愛する子どもたちの前で、命を落とした彼女のこと忘れてはいけぬ、忘れさせてはいけぬという想いから、私たちは2020年から毎年北谷のビーチで追悼集会を行っている。とても小さな集会であるが、彼女や家族への想いを馳せ、祈りを捧げ、優しい時間を過ごしている。しかし、どれだけ人がこの事件のこと、彼女のことを風化させずに覚えているのだろうか。2016年4月の末にも基地から派生する事件で若い女性が命を落とした。今年も命日の日には、多くの人が現場を訪れ、花を向けていた。どちらも同じ命。一方的な暴力によって、奪われた命であることは変わらない。だからこそ、私たちは彼女を忘れないために、毎年集い、祈りをささげている。(2022年4月9日、北谷町サンセットビーチ)

111

「忘れない。繰り返させない……祈り!」

【吉田勝廣。7回忌を前に孫三人と現場の草刈と清掃をやった。(向かって左から)吉田慎太郎(沖縄国際大学4年生)、藤城琴葉(具志川高校1年生)、藤城廣之助(具志川高校3年生)】

人は誰でも、子どもを産み、育て、幸せに、生きる権利がある。ここ、ウチナーでは、こうした自然の摂理がままならない。不条理だ。2016年4月28日、20歳で、結婚の夢が断たれ、5月19日に県道104号線沿いの茂みの中から、遺体となって発見された。私もその現場にいた。またか。怒りがこみ上げてきた。産み、はぐくんで来たご両親の顔が。我が娘の、無事を祈り、帰りを待ちわびていたご両親の願いも虚しく断たれた。何日もひとり、語ることもできず、淋しい思いをしながら耐えて、やっと暖かいご両親の元へ。県道沿いには献花が、日増しに多くなっていく。ウチナンチューのチムグクル、悲しみの怒り、悔しさを共有する。わがことのように。献花台もつくられ、県民の祈りはたえることはなかった。一週間に一回、皆さんのチムグクル

を大事にするために献花台の整理や周囲の草刈りをやった。孫も手伝ってくれた。その中で多くの出会いがあり、皆さんのウイを学ばさせもらった。7回忌も祈りと涙の中で終えた。ご両親の心はやすまることはない。4月28日はご家族の「祈りの日」、ウチナーは「屈辱の日」、ヤマトゥは「主権回復の日」である。琉球諸島の軍事化はすすみ、沖縄の不条理は復帰、返還50年経っても解消されることなく続いている。「ヌチル宝」はウチナンチューがすべての物事を解決するために何よりも最優先した言葉だ。私たちは「4月28日」を“忘れない”、“くり返さない”。皆さんと、共に決意し、祈ります。(2022年4月24日、恩納村安富祖の現場)

112

「米軍の泡に汚染される島」

【(向かって左から)与那城千恵美(48歳)、与那覇沙姫(37歳)、城間真弓(43歳)、具志堅美乃(43歳)】

2021年8月26日に、米軍が普天間飛行場から有機フッ素化合物(PFAS)を含む汚染水を、公共下水道に放出した問題に対し、憤りを感じたママたちが、下水道にPFASを放出された宜野湾市で「命の水を守るスタンディング」を企画した。環境省が定めた水質の暫定目標値は1リットル当たりPFOS、PFOA合わせて50ナノグラムとされている。宜野湾市が放出当日に下水道から採取した水は、調査の結果、この13倍に当たった。米軍が下水道に流したPFASとは複数の化学物質の総称で、国内では化学物質審査規制法(化審法)で2018年からPFOSの製造・輸入を全ての用途で禁止に! PFOAについても、政府は今年度内にも同様の措置を取る方向で検討している。また、これらは一度体に取り込まれると体の外に排出されにくく、妊婦さんなら早産のリスク、そして、発がん性を及ぼす恐れがある物質とされている。このように危険な化学物質を、我が物顔で民間の下水道に許可なく放出してしまう米軍の傲慢さに怒りで震える。基地を抱えるということは、生活に必要な水でさえも安全、安心でいられない。実際に放出問題の起こった宜野湾市のママたちが、その地域外に住むママたちに、「私たちは関係ないわ!」と、のんきに蛇口から出る水で野菜を洗ったり、飲んでいるけれど、実際は基地と隣り合わせの沖縄は、PFASにこの水も汚染されているかも知れないよ! と、必死で水を使うことを止めているところだ。基地問題と命の水を守ること。別々のように見えるけれど、どちらも声を上げなければ、子どもたちの未来も健康も守れない。そんな思いを胸に、愛とユーモアでこの異常な沖縄の様子を表現した。(2021年11月24日、読谷村)

113

「ハダカ」

【牧瀬茜、45歳、ストリッパー】

2017年の春、はじめて辺野古・大浦湾に来ました。護岸を作る投石が始まった頃で、ガラガラ轟音をたてて海が犯されていく光景と、共に見つめていた人たちの悲しみや怒りに胸が潰れそうでした。私は誰なんだろう……? 戦争と隣り合わせの生活を沖縄の人に強い続けているヤマトンチュ。沖縄の、地球の未来からこの海を奪っている大人。たくさんの生きものたちの

命と暮らしを奪っている人間。なんとかしたいし、何かしたい。以来、沖縄に通っています。ジュゴンがごはんを食べにきていた海草藻場、深い海の底から湧きあがるようなアオサンゴの森、たくさんの魚たちがぐるぐると泳ぎ暮らすミドリインのサンゴの海を泳ぎました。この魚たちも私も、果てない地球の営みのほんのひとときを生きている。私は、カラダヒツツで生まれカラダヒツツでこの世を去る魚たちの姿に見惚れました。そうして夢中で泳いでいてふと、この先へいってはいけぬような怖ろしさを感じるがありました。海から顔を出すすと向こうに見える工事現場。人間が大きな道具を使ってこの海を壊している。人を殺す基地の為に、金儲けの為に、海の命を奪っている。

サカナと同じハダカになればわたしは弱い生きものだ

サカナと同じハダカでおどれまいのちの声が聞こえてくる

誰かの平和を奪って生きるのはもう嫌だ

誰かの命を踏みつけに生きるのはもう嫌だ

私は国旗や武器を身につけない

殺すために生まれたんじゃないし殺されるためでもない

皆で生きるために生まれてきた辺野古、大浦湾をジュゴンが暮らす海にかえしたい。

私もいつか海にかえりたい。

世界が丸腰になって戦争のない地球にしたい。

(2022年4月7日、名護市瀬嵩の浜)

114

【清水早子、73歳、ミサイル基地いらぬ宮古島住民連絡会事務局長】

「虹の旗を手に、立つてもうすぐ20年。自衛隊死ぬな! 殺すな! 基地は撤去! と今日も立ちます。」(2022年5月20日、陸上自衛隊宮古島駐屯地)

115

「銃を持つ女性自衛隊員」

【清水早子、73歳、ミサイル基地いらぬ宮古島住民連絡会事務局長】

20歳代だろうか? 陸上自衛隊員の若い小柄な女性が、ライフル銃を不釣り合いに持って近づいて来る。マスクから見える目は涼しげな可愛い感じがする。年齢的には私の孫でも不思議ではない。なんでそんなことをしているの? と問いたくなる。そこそこ重いであろう銃を抱え、引き金を指をかけて、教えられた通りの動作をして、教えられたとおりの言葉で、境界線を越えて入って来る私を規制しようとする。まだ、恋の愛憎も、人生の苦楽も知らないだろう貴女は、暴力に脅え立ち向かったことも、生死の境を彷徨ったこともない貴方は、なぜ人を殺める武器を手には、大声を出し訓練をするのか? この国はなぜこんなうら若き男女に人を殺める訓練をさせるのか? だから、国家なんていらぬ。領土を守るために殺し合わねばならない国家なんかいらぬ。基地はまさに国家を可視化し、具現化する。だから、基地はいらぬ、ミサイル基地はいらぬと、私はたぶん死ぬときまで言い続けるのだろう。幼い時にすでに地獄を見たこの身の狂気を、国家の暴力による脅しで凌駕することなんてできないだろう。(2022年5月19日、陸上自衛隊宮古島駐屯地)

116

「畑の目の前に自衛隊基地」

【仲里成繁、68歳、メロン農家・ミサイル基地いらぬ宮古島住民連絡会代表。仲里千代子、68歳、一坪農園管理人】

2022年、沖縄県が祖国(日本)復帰してから50年、その記念事業として自衛隊を琉球列島に配備する日本政府の目的は何なのか?(沖縄を本土防衛の盾にする)住民の安全を守るのは地方自治体であって、我々の任務ではないと言い切る防衛省。(2021年12月1日、宮古島市上野野原「仲里農園」)

117

「我が家の集落の真上で訓練」

【仲里千代子、68歳】

宮古島の空まで追いかけてきたの? 中学生の頃いつも授業の邪魔をしていた訓練機は普天間の空では飽き足らず、今は宮古島の空でタッチアンドゴーですか。そのまま官邸の上まで飛んで行くのもいいかも?(2021年12月1日、宮古島市航空自衛隊野原分屯基地)

118

「暴行を受けた田畑増男さん、84歳」

【清水早子、73歳、ミサイル基地いらぬ宮古島住民連絡会事務局長】

私のそばで座っているのは、いつも一生懸命で真面目な田畑さん。足が不自由で体幹障害のあるこの高齢の人を、自衛隊員家族である39歳の外国人女性が、グーで殴って、突き飛ばした。週2の反戦スタンディング行動の準備で旗を立てようとしただけなのに。田畑さんは仰向けに倒されて、自力では起き上がれない。地面に倒れたままポケットのスマホで110番通報した。目撃していた通りかかりの別の女性が起こしてくれたという。加害女性が卑怯な暴力的な個人だという問題ではない。この女性をこんな暴力的になるまで追い込んでいる自衛隊内部の「空気」がおそろしい。人々が分断され、憎悪を飼い馴らされ、排他的になる。そんな社会の風潮がこわい。だから「love&peace」だなんてことを私は言わないが、どうすればもう少し穏やかな世界が近づくのだろうか? 生きようという希望をこの手にすることができののだろうか? 人を信じて裏切られないよと言ってあげられるだろうか? 倒れている田畑さんを起こしてくれた女性に希望の灯をみつけるしかない。(2022年5月19日、陸上自衛隊宮古島駐屯地)

119

「更地になった実家跡」

【与那原マサエ、78歳、「いのちと暮らしを守るオバーたちの会」世話役】

私が小学4年生の時、宮古島の下地町から1956年に当時の琉球政府の計画移民として石垣島に渡って来ました。父親は長男だったけど、土地も狭い。畑も少ない。貧乏でした。移民先の野底村下地団は、黒島から強制移住させられてマラリアで廃村になった土地にもかかわらず、政府は調査もしない、電気、水道もない、学校もない、医者もない、道路もない。2時間ほど山道を歩いてたどり着いたのが、「野底マーペー」の麓、

この下地団でした。そんな土地に連れてきて降ろしたことが、当時の琉球政府が私たちが人間として扱ったのか、どうにでもなれと思って行かせたのか、本当に疑問ですね。その地にたどり着いた者たちでどうにか住めるように整備をしていきますが、6年生の時、父親が42歳でなくなりました。私は母親と弟妹を守る立場になりました。できることは何でもして、がむしやらに働いてきました。(文章：与那原マサエ家族を支えたマサエさん)

命を守るために必死に生きてきたこの地に、命を奪う行動に加担する自衛隊ミサイル基地建設が今、急ピッチで進んでいる。必死に生き抜いた、だからこそ分かる命の重み。必死に拓いてきたこの地は、自衛隊の為の土地ではない。マサエさんたちが役人から騙されても、自分たちの生活を守るために耕してきた土地だ。その土地を守るために、マサエさんはいつも言っている。「子や孫のために命を張ってでも、自衛隊基地建設を阻止します!!」(文章：石川真生・上野さやか、2022年5月16日、石垣島野底下地団)

120

「開南十字路」

【上原正光、69歳、農業、基地いらないチーム石垣代表】

ヤマト中央政府、防衛省が陸自ミサイル基地配備を石垣島の平得大俣地区へ決定に対して周辺4集落の公民館(嵩田、開南、於茂登、川原)が配備反対決議を上げている。2019年3月1日に陸自基地建設工事が強行されて以降、予定地と最も隣接する開南集落は県道87号線を早朝から夕方まで工事関係大型車両による排ガス、振動と、構内での碎石騒音は基地建設による人災(公害)であり、人権と生活権の侵害、破壊が止むことなく続いている。現在、開南集落は約20世帯であるが、かつては50世帯の農村集落だったと聞く。沖縄島からの計画移民や石垣島内からの自由移民で開拓され、活気に溢れた歴史があるとも。その歴史が戦争や市民弾圧の機能を持つ軍事基地へと変貌しようとしている。日々強行されている基地建設現場は、開南集落から330メートルの場所に4棟の弾薬庫建設が進行し、大本小学校の児童らが登下校する県道87号線まで100メートルの近距離で、大本小学校までは約1.1キロしか離れていない。また開南集落から約250メートルの場所にはグラウンドと称する物が建設予定されているが、それはオスプレイなどの離着陸可能なヘリパッドだ!との市民の指摘に防衛省は意図的に回答しなかった。国・防衛省は2023年3月中の「石垣島駐屯地」開設を目論んでいるが、排水処理問題などで計画通りには開設できないだろう!陸自配反対運動を中心的に担って来た多数の人たちが「最後のチャンス」だ!と戦った2月27日の石垣市長選敗北から石垣島の軍事基地化と琉球弧の軍事要塞化を許さない闘いをアジアの民衆と共に再構築することが問われている。(2022年2月27日、石垣市開南十字路)

121

「監視活動の最前線」

【上原正光、69歳、農業、基地いらないチーム石垣代表】

石垣島、平得大俣地区の陸自ミサイル基地建設が2019年3月1日に強行された日から私の生活は、基地建設反対運動へと一変した。43年間のヤマト暮らしと決別して老後は妻と二人

でのんびりとしたハルサーの“夢”ができなくなった。住居から建設現場まで車で7.5キロ、15分足らずの距離。しかも造成工事音が畑まで鳴り響く状況下では、建設工事の進捗状況が気になってしまい、畑仕事よりも監視活動が優先する結果となってしまった。国・防衛省が取得した陸自ミサイル基地予定地46ヘクタールの内、「石垣島駐屯地」の主要な建物の造成工事が集中している旧ジュマール・ゴルフ場内は巨石群が目隠し状態と監視カメラ設置と厳重な警備員態勢では作業構内を見ることがほぼ不可能。国会議員、県議、市議や市民運動グループが情報開示などを求めても不誠実な回答しか出さない国・防衛省に対してドローン空撮や建設現場での違法工事の実態調査を沖縄ドローンプロジェクトと提携しながら、違法な造成工事を暴露し基地建設をストップさせることが不可欠だ。(2022年2月27日、石垣市の川平さんのパイン畑)

122

「諦めない女性たち」

【上原正光、69歳、農業、基地いらないチーム石垣代表】

県道87号線沿いで基地建設構内を出入りする車両チェックする中島佐和子さん(72歳)とTさんは同い年で東京と静岡の出身。二人とも基地反対運動が停滞する中、市内各地でのスタンディングや抗議集会、監視活動へ積極的に参加している。文字入りパラソルはTさんが作成したもので、道行く市民とドライバーへのアピール効果と際立っている。国・防衛省が恐怖するのは当該市民の一声、意思表示だ。正に「継続は力なり」。(2022年2月27日、旧ジュマールゲート前の県道87号線沿い)

123

「馬に学ぶ」

【高橋千恵、50歳、鍼灸師】

私は南牧場の馬たちと関わる時には「いつもここに居てくれて有難う」と伝える。ここに居る馬たちは、在来種の「与那国馬」ではない。ずいぶん前に馬を食用にしようと、大型の馬を掛け合わせた雑種だ。でもこれも人間の一方的な見方でしかなく、純血も雑種も「馬」には変わらない。この馬たちが住んでいる南牧場の中に自衛隊の基地が造られ、開設してから6年経つ。厩舎があった場所に基地が建てられたので、馬たちは大雨でも隠れる場所は無く、アダンの林は風避けにはなるが、雨は凌げない。でも彼等はそれを受け入れ、現在も逞しく生きている。基地建設の期間中、10tダンプが目の前に来ても、クラクションを鳴らされても、馬たちは退かない時は退かなかった。完全無視で道路の真ん中でくつろぐ。「牧場の中」を道が通っているの、馬たちが道を塞ぎ集団でくつろぐのは当たり前だ。道は人間の為であって、彼等には関係無い。最近もまた基地内で何らかの工事が行われていて、10tダンプが通るが、やはり馬たちの様子は変わらない。直ぐに退く時であれば、全く退かない時もある。人間に関心のある馬は人と関わるが、関心の無い馬は人から離れる。よほどビックリしたり、嫌なことをされない限り、馬が人を蹴ったりすることはない。もちろん、わざわざ馬自ら人を脅しに行ったり、傷付けに行ったりすることもしない。詰め寄られても、相手にしないから争いにならない。他の存在を認めながら、自分たちの在り方も保つ。平和的で他の存在と

調和した、とても芯の強いシンプルな在り方。色々なモノに誘導され、洗脳され、多くの人たちが忘れてしまっているけど、これは人間本来の在り方でもある。馬たちがここに居て、この「無機質な建物(基地)」の周りを平和と調和のエネルギーで保っていてくれることで、どれだけこの場所や人間は癒されているだろう。だから私は馬と関わる時に、感謝と労いの言葉を伝える。与那国島だけでなく、あらゆる場所にあるこの「無機質な建物」が1日も早く無くなりますように。(2022年5月14日、与那国島南牧場)

124

「第32軍司令部壕の保存・公開を求める会」

【副会長：垣花豊順、88歳、琉球大学名誉教授。理事：福村俊治、69歳、建築設計士】

人の心は物ではないから、目で視ることはできない。しかし、人の心はあらゆる活動の源で、戦争を始め、終わらせるのも人の心である。沖縄における地上戦は米軍が陸・海・空から無差別に砲弾を打ち込み、牛島満司令官が首里城の地下に構築された第32軍司令部壕を死守しないで、1945年5月22日、沖縄住民が避難している南部へ退却することを決定したために、「ありったけの地獄を集めた」戦場になった。人の心の現れである地獄を表現する手段としては、文字、音楽、彫刻、写真等がある。垣花は「文字」で第32軍司令部壕の保存・公開について説き、福村は「模型」で視えない司令部壕の全体像を示して保存・公開を説いている。この写真は、首里城の地下に構築された沖縄地上戦の司令部である「第32軍司令部壕」を建築設計士の福村俊治が模型で示した写真である。(2022年1月31日、南風原文化センター)

125

「蠶螂(とうろう)の斧、でも続ける」

【下地博盛、72歳、ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会共同代表】

2019年10月に始まった陸自による宮古島保良の弾薬庫・射撃訓練場建設。保良集落の目と鼻の先で対中国を想定したミサイル基地が出来つつある。基地面積は19ha。沖縄県のアセス逃れのため、あえてこの面積にとどめたとされている。弾薬庫3棟(現在2棟完成)、射撃訓練場は建設中だが、ここに尋常でない手間暇をかけている。長さ300mというこの射撃訓練場、ただの訓練場ではないようだ。ところで、弾薬庫から最も近い民家までの距離250m、保良・七又両集落が1km以内にすっぽり入る。この近さが一番の問題だ。私たちの反対活動は当初、土砂を満載して列をなすダンプトラックをゲート前で止める座り込みから始まった。この年、工事用車両のほとんどが保良集落を通過する国道の脇道(市道)から北ゲートに向かった。だが、座り込みはほどなくして機動隊の排除にあう。国道からゲートまで約100m。私たちは戦術を変え、数名から10数名で車列を止め、国道間を牛歩に切り替えた。道中、約50分その後30分。マイクリレーでさまざまな思いを語り、歌をうたい、励まし合いながら歩いた。11月後半ダンプの車列が止まった。そして工事は構内での整地作業と海側(南側県道)からの車両出入り道路の整備へと移った。以後、海側出入口が施

設の正門となった。明けて2020年4月からは弾薬庫の建設工事が本格化した。主要出入口は海側。県道は広く牛歩ができなくなった。私たちはゲート前にパイプ椅子をもちこみ、工事車両を止めた。作業員車両や軽トラックは除いた。ダンプトラックなどの車両は20分、生コン車は10分を目安に。生コン車は日によっては百台近くになり。早朝から午後3時・4時まで続いた。酷暑が続きドライバーは停車中に運転席で弁当を広げ、時々うたた寝もしているようだった。2021年、射撃訓練場の建設が始まりそして2022年、私たちのたたかいても3年目に入った。現在、工事車両の出入りは減った。だが、気は抜けない。一日中ゲート前に立つことは出来ないが、せめて午前中は立ち続けたい。ほぼ毎日参加してくれる地元の人々や応援の皆さんとともに。皆さんには心から感謝している。(2022年5月23日、宮古島市陸上自衛隊保良訓練場)

※蠶螂(とうろう)の斧：(カマキリが前あしを上げて、大きな相手を止めようとする意から)明らかに弱小のものが自分の力量もわきまえず、強敵に向かうことのとえ。

126

「抵抗のとき」

【下地茜、42歳、宮古島市議会議員】

2021年11月14日午前、平良港下崎ふ頭にて海上自衛隊の護送船が入った。反対する人々を県警が押しのけて、弾薬を積んだトラックが島に進み入るのを確認したあと、私は急いで弾薬庫のある保良へと向かった。保良(私の故郷であり、現在住んでいる場所でもある)の弾薬庫ゲート前には、すでにたくさんの人が集まっていた。報道陣、沖縄県警。市街地と、地元から集まった弾薬搬入に反対する人たち。沖縄県警が私たちを排除すれば、弾薬を積んだトラックは施設の中に運びこまれてしまう。それでも反対した証を残さなければいけない。私たちの意思が大きな様々なことにかき消されてしまわないように。パイプ椅子に腰かけて抵抗の時を待つ一人ひとりに挨拶を交わす。一つ一つのかよわい火が寄り集まって、あたりを照らす灯になる。抵抗の火は簡単には消えない。(2021年11月14日、宮古島市陸上自衛隊保良訓練場)

127

「分断」

【下地薫、68歳、ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会メンバー】

ミサイル搬入当日にゲート前に並べられるBOX。数日前から見えないように積まれていた物が何なのか分かりませんでした。当日になって、それが組み立て式のBOXであることが分かりました。それにしても何の目的で保良訓練場の敷地境界にズラッと並べているのか……。正門には立派なフェンスと検問所があるのにもかかわらず。BOXは2人で運べるほど軽そうに見えますが、10名の隊員たちでゾロゾロと運び丁寧に並べていきました。BOXの中を覗いてみると厚手のビニールの袋状になっていて水を貯めることも出来そうです。思わず雨が降ってくれないかなあと空を見上げました。興味深く眺めていた私と目を合わせることなく黙々と配置作業を進める隊員たち、引き上げ際に「これにチリを入れていいですか〜」。沈黙を保ったまま基地内に戻っていく隊員たち、数秒間がありましたが一人大げふりむいて

「ダメです～」と答えてくれました。防衛省は事ある度に「住民にご理解頂けるよう丁寧に説明を致します」を繰り返します。些細なことですが実践できるように求めていくことも闘いの一つだと思っています。(2021年11月14日、宮古島市陸上自衛隊保良訓練場)

128
「抵抗の旗を掲げつつける」
【下地博盛、72歳、ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会共同代表】

2019年11月に始まった陸自の宮古島市保良地区での弾薬庫・射撃訓練場建設工事。保良集落を貫く国道390号線近くの北側ゲートが主要出入口だった。2020年に出入口が海側に移動、工事の車列が住民の視界から消えた。海側出入口ゲート前では牛歩等の抵抗がむずかしくなった。それでもゲート前には日々地元の人々をふくめ呼応する人々が近く、遠くから集い抗議をつづけている。(写真は地元の人々)(2021年12月1日、宮古島市陸上自衛隊保良訓練場)

129
「動物が好きな茜さん」
【下地茜、43歳、宮古島市議会議員】
実家の道向かいのヤギ小屋でクソまみれになりながら脚を怪我した子ヤギを介抱していた。(2022年5月23日、宮古島市保良)

130
「沖縄でバイレイシャル(ミックスルーツ)として生きること」
【親富祖大輔(41歳)、愛(39歳)、ティータ(11歳)、ユンタ(10歳)、ニヌファ(6歳)、カナヨー(3歳)】
日本や沖縄でミックスルーツの子供たちがどう扱われてきたかを隠すのが優しさだろうか。1985年まで日本国籍がもらえずにいたこと、公立の学校に通うこと、戦争孤児の施設に入ることすらゆるされなかったこと。なぜこんなにミックスルーツの子供たちが増え、生まれ育っているのに、社会はいつまでも昨日来たばかりの外国人のように区別するのか。学校教育に求めたい。日本人教育を変わず推し進める姿勢を問いたい。日本人らしさを子供たちに乱暴になげていないだろうか? おじぎの文化を教える時に「日本人らしい」と付け加えることで、ミックスルーツの子供たちを置き去りにしていないだろうか? 社会がマイノリティに与える問題を理解出来ないということは、無意識に自分自身が問題を与えていることにも気付いていなかったりする。

アメリカの犠牲の上に成り立つ社会も、沖縄の米軍基地も、人種主義も、「マイクロアグレッション」も成り立たせているのは「無関心の意識の人々」だ。そういう人たちが無関心から抜け出すと社会や世界は変わる。(2021年4月24日、本部町管市場)

パート10 2022-2023

131
「石垣島の自衛隊」

組織的に自衛隊がミサイル車両を含めて大量に石垣に運んで来たのは初めて。早朝から、それを阻止しようと奥間政則さんら住民たちが集まり、自衛官と睨み合いをしている。(2023年3月5日)

132
「石垣島の自衛隊」
上原正光さん(70歳)と県警が睨み合い。(2023年3月5日)

133
「石垣島の自衛隊」
初めて、軍の車両が石垣島に港から入った。抗議に集まった市民と自衛官、県警が睨み合い。(2023年3月5日)

134
「石垣島の自衛隊」
海上自衛隊の輸送艦「おおすみ」で、弾薬を輸送。(2023年3月18日)

135
「石垣島の自衛隊」
陸上自衛隊石垣駐屯地開設に抗議する、「基地いらないチーム石垣」代表の上原正光さん(70歳、写真左)(2023年4月2日)

136
「石垣島の自衛隊」
開設したばかりの駐屯地。県警がずらりと並んで警護する中、2人の男女がその足元で抗議旗を堂々と広げてなにやらやっている様子。見ていて凄いな、この2人と感心した。(2023年4月2日撮影)

137
「石垣島の自衛隊」
2023年3月16日、陸上自衛隊石垣駐屯地開設。上原正光さん(70歳)の仲間たちが関東から駆けつけてくれた。「PAC3も基地も駐屯地もいらないよ!」と叫んでいた。(2023年4月27日撮)

138
「石垣島のパイナップル農家」
パイナップルの出荷の合間に、菅銘光子さん(69歳)が蚕の糸を紡ぐ。1(2023年4月26日)

139
「石垣島のパイナップル農家」
パイナップルの出荷の合間に、菅銘光子さん(69歳)が蚕の糸を紡ぐ。2(2023年4月26日)

140
「石垣島のパイナップル農家」
パイナップルの出荷の合間に、菅銘光子さん(69歳)が蚕のまゆを熱湯に入れて、中のさなぎを取り出し糸を紡ぐ。3(2023

年4月26日)

141
「石垣島のパイナップル農家」
今年、小学校に入学した農家の孫。朝、集団登校中を待ち構えて撮影した。(2023年4月28日)

142
「石垣島のパイナップル農家」
菅銘さん夫婦と孫が、農園の中で記念撮影中。(2023年4月28日)

143
「石垣島のパイナップル農家」
パイナップルの出荷準備に忙しい。(2023年6月22日)

144
「石垣島のパイナップル農家」
パイナップルの出荷準備。(2023年6月22日)

145
「石垣島のパイナップル農家」
一休みする足元に、熟したレンブが落ちていた。(2023年6月22日)

146
「石垣島のパイナップル農家」
出荷作業の合間を見て、母親が遊んでいる息子を迎えに来た。(2023年6月22日)

147
「石垣島のパイナップル農家」
道路沿いにあるパイナップルの無人販売コーナー。(2023年6月22日)

148
「石垣島のパイナップル農家」
今日は慰霊の日で学校は休み。セミ捕りに夢中な孫。(2023年6月23日)

149
「石垣島のパイナップル農家」
うちは親の代からパイナップル栽培と販売をしている。朝6時から収穫に畑に行く。朝が早いので昼寝しないと体が持たない。午後1時には毎日、昼寝していた。今までは、車もたまにしか通らなかったのに近くに自衛隊基地ができたおかげで、基地に関わる人の出入りが増えた。おかげで、うるさくて昼寝ができなくなった。自衛隊の人は迷彩服を着けてバイクや車で道路を行き来している。みんなに慣れてもらうためでしょ! 今年3月に「基地の開所祝いだ!」と、騒いでいたけど、あきらめたら終わりだよ。開南は小さい集落だから反対も広がらないけど、「ここから出ていけ!」と、規制されても、ここで家族と一緒にずっと

農業をやっていきたい。(2023年6月23日)

150
「石垣島の自衛隊」
陸上自衛隊石垣駐屯地ゲート前。上官らしき人が出てきた。(2023年6月22日)

151
「石垣島の自衛隊」
石垣島に陸上自衛隊石垣駐屯地が開設された。(2023年6月24日)

152
「石垣島の自衛隊」
民間地の人口ピーチ近くに、地对空誘導弾パトリオットミサイル(PAC3)が停まっていた。迷彩服の自衛隊員達が何やらやっている様子が道路から見えたのでフェンスの近くまで行き、「何してるんですか?」「訓練してるんですか〜?」と何回も大声で叫んだが、シカトされた。(2023年6月24日撮影)

153
「与那国島の自衛隊」
与那国空港に着陸した自衛隊の戦車が運び込まれ、山田和幸さん(70歳)ら住民が抗議した。(2022年11月17日)

154
「与那国島の自衛隊」
与那国空港から出てきた戦車。(2022年11月17日)

155
「与那国島の自衛隊」
与那国空港から一般道に移動した戦車を道路わきに待ち構えて抗議する、向かって左より、狩野史江さん(62歳)、山口京子さん(64歳)、山田和幸さん(70歳)(2022年11月17日)

156
「与那国島の自衛隊」
陸上自衛隊与那国駐屯地に与那国空港から、さまざま抗議に押しかけた住民たち。(2022年11月17日)

157
「与那国島の自衛隊」
この馬たちが住んでいた南牧場の中に自衛隊基地が造られ、開設して7年が経つ。かつて馬たちが住んでいた場所は自衛隊基地に変わってしまい、馬たちは道路の両わきの草を求めて移動しながら、たくましく生きている。(2022年11月16日)

158
「宮古島の自衛隊」
市街地で、安倍元総理の国葬に反対する「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」のメンバーたち。(2022年9月27日)

159

「宮古島の自衛隊」

「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」共同代表の仲里成繁さん（69歳）が畑で作業中。（2022年9月29日）

160

「宮古島の自衛隊」

「ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会」共同代表の二人。仲里成繁さん（69歳）と清水早子さん（74歳）（2022年9月29日）

161

「宮古島の自衛隊」

「ミサイル基地いらない住民連絡会」共同代表で、メロン栽培農家の仲里成繁さん（69歳）の畑の前に、陸上自衛隊基地がある。ゲート前で、監視とアピール（抗議と隊員への訴え）を行う、抗議する会のメンバーたち。（2022年9月29日）

162

「宮古島陸上自衛隊保良訓練場」

陸上自衛隊保良訓練場で「ミサイル・弾薬庫配備反対住民の会」共同代表の下地博盛さん（73歳）と妻の薫さん（69歳）が夫婦二人三脚で抗議活動をずっと続けている。（2022年9月26日）

163

「宮古島陸上自衛隊保良訓練場」

毎日やっていることなので、工事車両や軍用車両が来るたびに記録しています。どのようにして基地が造られるのか、そして強化されていくのか。目をそむけるのではなく、目を大きく見開いて直視し続ける辛い活動です。道路に座っているのが、夫の博盛です。車両がゲートに近づいてきたらサッと撮る癖がついています。7～9月までは、クソ暑いです。（文章：下地薫、2022年9月27日）

164

「宮古島陸上自衛隊保良訓練場」

射撃訓練場の建設で続々ミキサー車や土を運んでいるダンプ、悔しいけど記録していくしかなくて……抗議を示すためにしばし車両を止めている間にパチリ。（文章：下地薫、2022年9月27日）

165

「宮古島陸上自衛隊保良訓練場」

向こう側に見えるのは私達が住んでいる保良集落。隣接してミサイル基地を造り集落と基地の境界近くに射撃訓練場が造られている。そして手前に弾薬庫。かつて沖縄戦で日本軍は住民を盾にして戦ったが、戦後日本軍から自衛隊になった現在でも何も変わらない。（文章：下地薫、2022年9月28日撮影）

166

「誹謗中傷クイズ～ママ達が考えた『ホントの沖縄』を伝える

方法」沖縄島

【宮城智子（54歳）与那城千恵美（50歳）、#コドソラ（子どもの空を守る）】

私たちは、子育て中の母親です。わずか1週間のうちに、子どもたちの保育園と小学校へ米軍ヘリから部品や窓枠が空から落ちてきました。すぐに、子どもたちを守るために、声を上げ始めました。その直後から、様々な誹謗中傷が私たちに向けられるようになりました。とても怖いし、傷つきます。しかし、これは、私たちだけでなく、沖縄で声を上げる人たちには同じようにキツイ言葉が投げつけられます。でも、「これをそのままにしといていいのかな？」私たちは、子どもを持つ母親。活動する中で、どんなに悲しくても悔しくても、笑顔で活動することをみんなで心がけています。そんな私たちらしく、ホントの沖縄を伝える方法としてひらめいたのが『誹謗中傷クイズ』。『誹謗中傷クイズ』で伝えたいことは、「これはデマだよ!」「これがホントのことだよ」「言われたらダメージ（とても）傷つくよ」この3つです。それを、クイズ形式にして、楽しく笑顔で、ホントの沖縄を伝えていきます。私たちが頭にかぶっている小鳥帽には、小鳥だけが飛ぶ安全なお空がいいな! という願いが込められています。「普天間は何もなかった」というデマ発言をした方のお陰で、私たちの元に「お金のために基地の周りに住み始めたお前たちが悪い」というキツイ言葉が向けられます。なので、今回はデマ発言をした方へ「メーゴーサー（げんこつ）しようね!（沖縄では、悪い事をした子どもへ、おしおきの意味で、「メーゴーサーしようね」と使ったりします。）との思いでこの表現をしてみました。ネットではたくさんのデマがあります。それが、どんどん拡散されて、多くの人たちが調べもせず、それを信じ、デマがあたかもホントの事のようにになってしまうとても怖いものです。その上、それを信じた人たちが当事者に誹謗中傷という攻撃をします。ネットでは簡単に言葉表現できます。軽い気持ちで打ったその言葉で悲しんで苦しんでいる人がいる事を、多くの人に知って欲しいと思います。（2023年7月1日）

凡例

・本ハンドアウトでは、展示順に従い、各セクションの解説を掲載している。個別のキャプションがある作品については、解説の後に作品番号、キャプション、制作年を掲載した。

・セクションの解説は、天野太郎が執筆した。文中の石川真生の言葉は、2021年に沖縄県立博物館・美術館で開催された展覧会「石川真生展：醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。」（会期：2021年3月5日～6月27日）図録内のインタビューから引用した。

・インタビューの実施内容は以下通り。

「石川真生インタビュー」『醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。石川真生』T&M Projects、2021年、pp.6-12

インタビュー：亀海史明（沖縄県立博物館・美術館学芸員）、趙純恵（福岡アジア美術館学芸員）、中村史子（愛知県美術館学芸員）

収録：2020年7月9日、30日、8月27日、9月23日

構成：亀海史明